

When she first saw the boy among
the Shinjuku night crowd,
Akiko Aoshika was sure that she had
met him somewhere before.
Of course, that wasn't possible.
She knew it was just that

月光
魔術
専
門

Gekko
Majyutsu
Dan

「春の魔法使い」

Vol.1

平井和正

KAZUMASA HIRAI

common trick of the memory called deja
vu—merely a false recollection of a
person just met, or a place
visited for the first time.
It was that strange feeling that past
events were being exactly repeated.

立
読
み
版



DIGITAL
NOVELS

LUNATECH

目次

MOON 1

MOON 2

ライオンヘアは嵐と道連れ

月光の妖

レイピストに白い花束を

あとがき

イラスト／泉谷あゆみ



遊びをせんとや生れけむ、
うま

戯れせんとや生れけん、
たわぶ むま

遊ぶ子供の聲聞けば、

我が身さへこそ動がるれ
ゆる

M

O

O

N

1



G

e

k

k

o

M

a

j

y

u

t

s

u

D

a

n

目が眩^{くら}むほどまばゆい満月が、中天に輝く。

深い水底のように、青白い月光で満たされ、妖しい空間が夜の底に沈んでいる。

月光には狂気がある。まばゆい月光は、昏^{くら}い頭蓋骨^{ずがいこつ}の内部にまで忍び込み、妖しい蠱^{まし}の色に染めてしまう。

その闇のように黒い巨犬の目は、血の色をした双子の月だ。巨犬の脳髓^{のうずい}は満月の蠱^{まし}に惑わされた狂気が膨れ上がっている。

黒い巨犬は影のように、広大な庭園に垂れ下がる、月光のヴェールの中を滑った。

侵入者の姿を見いだした瞬間、黒い巨犬は発狂した。

月下の大庭園は、突如として鬼気が立ち込めた。最大級のドーベルマン・ピンシャーをもはや制止できるものは存在しなかった。

その侵入者はほんの子供だった。それも就学年齢にやつと達した年齢の男の子で、さもなければ、攻撃犬の放された大富豪の領地へ入り込むなどありえなかった。

少年は、黙々と突進してくる黒い巨犬を認めても、驚く気配も見せなかった。武器を所持する屈強な男が見ても、怯^{ひる}まずにはいられない攻撃犬は、少年にとり畏怖^{いふ}の対象ですらなかったのだ。

漆黒のドーベルマン・ピンシャーは、まったく無音無声のまま一気に距離を詰めた。最後の致命的な攻撃を意味する、跳躍にかかった巨犬の双眼は赤い月そのもので、大き

く下顎の開いた大口の間の、寒けのする^{たくま}遅しい犬歯は、
化け物じみてすらいた。

大きく跳躍して、襲ってくる黒い巨犬を、少年は大きく
みひらいた目で仰いだ。信じられないという目の色だった。
巨犬の牙は、前に突き出された男の子の細い前腕を無慈悲に咬^かみちぎり、ついで巨大な体重で少年を押し倒しつつ、
少年の肩口にがっぷりと牙を埋め、組み伏せた生贄^{いけにえ}の全身
を思うさま咬み裂いた。

少年のからだはずたずたになったが、その細い両腕は、
巨犬の喉頸^{のどくび}をがちりと捕らえて放さなかった。

それどころか、月明かりで黒いインクのように見える、
鮮血がいくすじも流れ落ちる腕が、じりじりと確実に巨犬
の大顎を押し戻しつつあった。

ドーベルマン・ピンシャーの巨体に不気味な痙攣^{けいれん}が生じ
た。

驚くに足る逆転が生じていた。

死の顎に捕らえられているのは、幼児のような少年では
なく、圧倒的な体格と体重差で少年を組み敷いた、黒い巨
犬自身だったのだ。

真っ黒な鮮血に彩られた、男の子の細い両腕は、犬の牙
を押し戻しているのではなく、犬の筋肉でみちた太い首を
絞めつけていたからだだった。

それは月光の壘ではなかった。やがて、痙攣を続けてい
たドーベルマン・ピンシャーの全身の筋肉が不意に弛緩^{しかん}し

た。息絶えた巨犬の頭部が、少年の顔間近にぐんにやりと垂れ下がった。

からだの上にのしかかる、膨大な巨犬の死骸をおしのけ、すわり込んだ少年は、すでに異形のものに変わっていたようだ。

少年の呼吸は荒く、いまだに巨犬の牙に切りさいなまれる苦痛に悶えているかのようにだった。

太い剛毛が生き物のように渦巻き逆立ちながら、ぐいぐいと延びてゆき、少年の全身を覆い隠した。

内部に膨れ上がる高圧の衝動に耐えきれず、異形の獣人と化した少年は、ぐっと喉をそらして天空を仰ぎ見、その双子の赤い月のように燃える双眼が、夜空に輝く満月を凝視した。

激しい叫び声が喉を膨らませるように噴出してきた。

その咆哮は、長く尾を引いた狼の遠吠えにほかならなかった。

M

O

O

N

2



G

e

k

k

o

M

a

j

y

u

t

s

u

D

a

n

どっと舞い狂う桜吹雪の中から、同僚の龍沼るみなが現れた。

パールグレイのスーツがエレガントで、しかも艶めかしい、と城門じょうもんは思った。

龍沼るみなは、私立学園、博徳高校に奉職する若い女教師だ。教師になってから二、三年はたっているだろうに、るみなはまるで現役の女子大生のように見える。

なんともいえぬ、儂はかなさとたよりなげな雰囲気まを纏まとっているせいかもしれない。相当な美人なのだが、まるで夢の中で出会った美女のように感じられるのは、そのためだ。

「おはようございます……すごい桜吹雪！」

国語担当の同僚城門と挨拶あいさつを交わしたるみなは、嘆声をあげた。博徳高校の通学路は、桜並木になっており、四月初旬から中旬にかけて桜のトンネルになる。

桜が散りだす時は、めくるめくような花吹雪が荒れ狂う。風が強い日は、目を開けていられないほどだ。

くしゃん、とるみながくしゃみをして、花吹雪のまっただなかで足をとめ、ハンドバッグの中のハンカチを探した。「龍沼先生、お風邪ですか？」

龍沼るみなのかくしゃみは可愛い、という気分で長身の城門は彼女を見下ろした。ついすると手を延ばして、そのほそい肩を抱いてやりたい衝動に駆られる。

長身の城門は、肩幅が広く、骨張ってはいるが、愛嬌あいぎょうのある顔つきの教師だった。アメリカ国籍の二世だが、日

本語は達者だ。剽^{ひょう}軽^{きん}なところが受けて、女生徒のみならず生徒全般に人気がある。

「昨日からちよつと……鼻風邪ですけどね」

龍沼るみな、鼻風邪気味の声もかわいい。女のかawaiiさのフェロモンそのものだ。

登校中の生徒たちは、昨年度から制服が廃止され、若者ファッションの塊みたいな連中が大部分だ。中には旧制服をいまだに着つづけている頑固者もないではない。

日本の生徒たちの気風も、昔に比べると驚くほどアメリカナイズされ、様変わりが著しい。以前のように、教師だからといって、別格のように挨拶されることはない。

教師にきちんと挨拶する生徒はむしろ少数派だ。城門のように一般的に人気のある教師だけが、生徒たちから声をかけて貰える。

「センセ、おはよっ」

追い越しざまに、城門の背中を気安く叩いてゆく女生徒すらいる。日本に高校留学した経験のある城門には、日本の学生生徒たちが異人種に変貌してしまったような、不気味な気分にする。

「城門せんせ、もててるじゃん！」

城門には親しみをこめて挨拶する女生徒も、龍沼るみなには知らん顔だ。きつと嫉妬^{しつと}しているのだろう。あからさまにイーッ！ と顔を顰^{しか}めて見せる女の子さえいる。

「でれつとすんじゃねえぞ、こら！」

そんなことを囁いていくのは、男生徒ではない。最近の生徒たちにとり、おとなはただの年かさの同輩にしかすぎないのだ。学校教師といえども例外ではないようだ。

「おもてになるんですね、城門先生」
るみながわらいながらいう。

「城門先生といっしょだと、あたくし女生徒たちに意地悪されそう」

「だいじょうぶ。オレが護^{まも}ってあげますから」

「闇討ちでもされそうで、ますますこわいわ」

城門は何度かアタックを試みたのだが、その都度巧みにいなされてしまっていた。なんととはなしに、最初に出会った時から、ものになりそうな気がするのだが、手を握るとさえままならないのだ。

龍沼るみなは、見た目よりもしっかりしていて、たよりなく儚げに見えるだけなのかもしれない、と城門は時折感じる。

その細身だが、みっちり肉の満ちたからだを両腕の間に抱きしめるのは、彼の夢想だが、それが果たされるのは、どうやら近い将来ではなさそうだ。

博徳高校正門の前では、いつものように登校時のボディチェックが行われており、生徒たちの人溜まりができていた。

「あーっ、まただあっ」

女生徒たちのかまびすしい不満の声が聞こえてきた。

「またクロのやつ、バイクで乗りつけやがってえ！ あれやられると、頭にきちゃうんだよねっ」

「クロのやつの前と後は、全身完全チェックだもんな……」

「だって、ヤバイもん、押しつけられるからさあ」

バイク通学は許可されているが、やはり一リットル級の大型バイクとなると、異彩を放つも道理だった。

真っ黒な革ジャンに革ブーツ、フルフェイスのヘルを纏まとった、その大柄な生徒は、更にその大型バイクにまして注視を集めるものがあつた。

「早くヘルメット、ぬいで」



武装警備員に促うながされてようやく、不精たらしくメットをはずすと、猛犬のドーベルマンじみた容貌が出現した。

名状し難いほど、独特の獯猛どうもうさを孕はらんだ風貌の持主だった。

人間の容貌は、さまざまな動物的な特徴を隠し持っていることが多いのだが、その生徒はまさしく猛犬を連想させずにはおかぬという貌かおの持主だったのだ。

正門前に設置された検問システムは、真黒まなぐろの大柄な体が通過するたびに、やかましく異物発見の警報を鳴らしたてゝることをやめないのだ。

そのたびに出てくるのは、鍵束やメダル、コインで、検問システムのチェックを目的とする拳銃、ナイフ類の危険物ではない。

真黒という猛犬じみた貌の生徒が、ボディチェックを愚弄するのが目的でやっているのは、だれの目にも明らかだった。

「もういい！ 通っていいぞ！」

武装警備員が生徒たちの抗議コールに耐えかねて、ギブアップした。

「バイクのチェック、いいのか？」

「だから、さっさと持ってけといっとるだろ！」

警官上がりらしい横柄な武装警備員がなった。猛犬じみた真黒の目がぎらっと殺気だった。だが、登校生徒たちの人溜まりの中のもみなり目と目が会うと、殺気が消えた。

「へっ。そうかよ」

あざけ

嘲るように真黒は言い捨てて、大型バイクにまたがり、圧倒的な排気音を残して、校内駐車場へ走り去った。

「真黒って、抜け目がないんですよ」

城門が、龍沼るみななの耳元に口を寄せて囁く。男の呼吸が触れると、るみなはぎくくつとして、からだを引いた。

鳥肌が頬に立っていた。

「あ、ごめん……」

「いいんです。いきなりだったから、ちょっとびっくりして」

彼女、感じやすいんだな、と城門はぞくりとしながら考えた。この美人の先生は、牡意識をへんに駆り立てるところがある。

「いや。真黒のあのバイク、きちんとチェックすると、危ないものがでてきそうな気がするもんだから」

「つまり、真黒はあの大きなバイクに、何か隠してるんですか？」

「オレはそう確信してますよ。真黒の視線がバイクに頻繁に注がれてるのに、警備員のおっさん、気づかなかったみたいで」

龍沼るみなは素直に感心して、米国籍の同僚の貌を眺めた。

「ほお。ジョウさんって、よくご存じ！」

「それに龍沼先生の顔をみたたん、真黒のやつ態度が変わりましたね。気づきませんでしたか？」

「ぜんぜん……ジョウさんって、観察力が鋭い。プロの刑事さんみたい……」

「龍沼先生は、あの真黒の目つきに気がつかなかったんですか？」

「は？ あたし、にぶいですから……」

龍沼るみなは他意無さそうにわらった。彼女はその気になれば、好きな時に無邪気になれるらしい。

「なんか、心配だな。龍沼先生みたいな女性は、このハイスクールでは赤頭巾ちゃんみたいな感じで……」

「そうでしょうか。あたし、そんなにあぶなっかしく見えますかあ？」

検問フリーパスの教職員ふたりが歩いている背後から、

どたばたと生徒たちが走って追い越して行く。

真黒のおかげで、検問所に人がたまりすぎ、大量の生徒が割り食っているらしい。

「今日は、なにか奇妙な雰囲気がある……龍沼先生はそれ、感じませんか？」

「奇妙なって？ 何となくざわざわしてるとか」

「そう。今日は満月ですからね。満月になると、犯罪発生率が急上昇するというのは、すでに判明済みの事実でね。学問的にはバイオタイドというんです」

「へー。そうなんですか、ぜんぜん知りませんでした」

「龍沼先生も気をつけたほうがいいですよ。真黒もそうだけど、男生徒たちの龍沼先生を見る目つきがどうもおかしい」

「やだ。おどかさないでくださいよお」

「おどかさわけじゃないけど、龍沼先生、今日はすごく魅力的で。それも、きっと満月のせいじゃないかな？」

「知りません！ 生徒たちがざわついてるのは、他に理由があるんですよ、きっと。だって、噂の転校生が今日、現れる日じゃないですか」

「ああ……龍沼先生も、そのこと気になりますか？」

「別に。予見や先入観を持って生徒を見るのは禁物ですよ？」

「それはそうだけど……」

間近に龍沼るみなを見るのは、スリルがあった。きめの

細かい肌はなめらかで炊き立ての新米のようにピカピカ輝く艶と照りがある。城門は米国育ちの二世のくせに、生粋きっすいのライスイーターだ。

独身で男盛りの城門が、るみなを前にして、牡意識の化身になってしまふのは、やむをえぬことだったかもしれない。

＊

城門が、なんらかの求愛行動にしようとしたのは、確かだが、あいにくその余裕は残されていなかった。背後からひどく軽快な排気音が急接近し、彼が顔を顰める間もなく、背中をいやというほど引っぱたかれた。

「しゃあっ」

軽く叩くなどという生易しい代物しろものではなく、長身の城門が五メートルほど前方に飛ばされてしまうほどのショックがきた。

つんのめり、顎から先にコンクリートのアプローチの路面に突っ込まないだけ、まだしもだった。

城門は肺中の空気を全部絞り出され、前かがみになってゲホゲホと咳き込んだ。

「おはようございますっ」

景気のよい声が、ヤマハの50ccのスクーターから飛んできた。若い女の弾力的な声で、僅かに外国人の訛りなまがイン

トネーションに感じられた。

猫科の生き物を連想させる大きな双眸がキラキラ燦めいて、腰まで届くような長い栗色の髪を太く編み込み、真紅のリボンで結んだ娘が、スクーターから城門と龍沼を振り返った。

中華料理店の出前か、と城門はいつも思うのだ。

「リーミン！ 何度いえばわかるんだ?! 背後から追いつきざまに不意打ちの真似はよせといったろ！」

城門が憤然とどなる。相手はいつころにお構いなしで、クスクス笑っていた。

「心配ないよ、ジョウ。どこも悪いところ、なかたよ」

喋り方は、わざと中国系の日本語をパロッているようだった。

「合格よ。今度は体力検定してあげるから」

「ごめんだねっ。今のは危なかったんだぞ、リーミン！ もう少して、龍沼先生まで巻き込むとこだった」

「朝から、イチャイチャするから、いけないね」

リーミンと呼ばれた娘は、嘲るように言い返した。るみなを無視していた。いつでもそうなのだ。城門が絡むと、龍沼るみなは女生徒たちに反感をもたれるだけでは済まなくなる。

「だ、だれがっ」

「チューリップ。はなのしたがり長い！」

「も、ものすごく古い洪積世時代の洒落を！」

るみなは、ふたりの掛け合いに割り込む隙もなかった。
このふたりの外国籍教師の関係は、るみなには理解に苦しむ点が多い。



一口でいえば、喧嘩友達という間柄がいちばん近いのかもしれない。しかし、喧嘩を吹っ掛けるのは必ずリーミンのほうで、城門はむしろ回避に専念している。

「リーミン、おたくのジョークはいじめに近いぞ！ いや、いじめそのものだ！ 聞かされるだけで悶絶物だよ！」

「いじめなどでない！ ジョー、おまえ、心が曲がっているぞ！」

わらっていいのかどうかわからないが、どこまでいっても、城門とリーミンの掛け合いが、まともに終息する気配はない。

るみなにいえることは、リーミンが城門に絡むことをおおいに愉^{たの}しんでいるらしい、それだけに尽きた。

リーミンのやり方は手荒いし、城門の迷惑などお構いなしだが、それでも友好の意図がないとはいえなかった。

るみなにも、この種の好意の表現については、おぼえがある。それは噛み癖のある犬に関する記憶で、その犬は好意を持つとやたらに相手を咬む癖があったのだ。

ひどい怪我をさせるような噛み癖ではなかったにしろ、まだ子犬なので歯は尖っていて鋭く、噛まれるとかなり痛い思いをさせられた。

リーミンのふざけ方は、その種の好意の^{あらわ}顕れに似てい

る、とるみなは思った。ほかのやり方をとることができないのだ。別に悪意があるわけではない。

それがわかったとしても、迷惑度がこれっぽっちも低下するわけではなく、困った状態の解消の決め手はなかったのだ。

「ジョー！ もっと素直になれ！」

捨てぜりふを残して、リーミンと呼ばれる中国娘は、スクーターで走り去った。最後まで、るみなを完全に無視してのけた。

「本当におもてになるんですね、城門先生」

龍沼るみなは、心からの微笑を浮かべた。リーミンが城門に気があるのは、誰が見ても明らかで、中国娘はひどく



屈折したやり方で、それを表現しているにすぎなかった。
わざとやっているものでなければ、よほどの不器用者なのに違いない。

るみなはそれをほほえましく受け取っているにすぎないが、リーミンのあからさまな無視のやり方は、るみなに対して一種、含むところがあるようにも感じられた。

もしかすると、リーミンはひそかに龍沼るみな自身を、恋のライバルに擬^ぎしているのかもしれない。

とんでもない、そんなこと、とるみなは思わずにはいられないのだが、他人の目はそんなるみな意識とは逆行して、この三者を三角関係と見なしはじめていることも、確かなようであった。

「今日は、満月ですから……」

城門はにがわらいしながらいった。

「朝から、この調子だと身が持ちそうありませんよ」

こともあろうに、満月の日に、噂の転校生が博徳高校の正門をくぐってやってこようとは。

もちろん、それは龍沼るみな精一杯のジョークの限界だった。るみなは昔から、冗談があまり通じない人間だと評されていた。

自分では、そんなことはさらさらないと信じているが、他人からすると、よほど冗談が通じないカタブツ的性格に見えるらしい。

自分の精一杯の冗談に義理立てしているように、落ちつ

かぬ気分のままに午前中が過ぎ去った。

当然、くると思われた時間がすぎ、午後の授業が始まった。でも、転校生はいっかな姿を見せなかった。

気分が落ちつかぬのは、朝、正門前で真黒の顔を見たせいかかもしれない。

真黒は、校内きつての問題生徒なのだが、るみなにとつては、それだけではとどまらないものがあつた。

真黒タケシという名が、龍沼るみなを担当する二年C組のクラス名簿に記載されていなければ、どんなに気が楽だったろう。

真黒の戸籍名は、獺と書く。獺猛の獺をタケシと読ませる。このような名前をつけられた真黒が、特殊な暴力性と犯罪性を育てたとしても、るみなは疑問を覚えない。自分の子供の名に、このような特殊な漢字を当てる親の気持ち^が、るみなには理解できない。

座興で命名したのではないか、という気持ちにすらなる。親の無責任な座興で、特殊な名前をつけられた子供は堪らない。

真黒はほんの子供の頃から、自分が不当な十字架を背負わされたことを、意識しながら育つたに違いない。

真黒は、その過去に何を背負ったにせよ、人間味のある目をしていない。まるで防弾ガラスのように装甲された目つきをしている。何の感情も窺^{うかが}わせない目である。

担任教師としてのるみなは、教え子の真黒と会話を交わ

す機会を持っているのだが、会話の内容については、ほとんど記憶がない。

真黒の感情を圧殺したような、低いトーンの歯擦音の際立つ声だけが際立って印象に残っている。家族のことで何か質問した時、真黒は変なことをいった。

『もう世も末だから……』

そんな言葉を覚えている。暗室の中を覗き込むような暗い目で、ぽつんと漏らした一言が、ひどく印象的だった。

考えてみると、真黒は教師と会話を交わすような生徒ではなく、るみなと口をきいたことさえ不可解なことだった。

生活指導の棚橋教師は、真黒を評して、世紀末っ子だといった。少し、不謹慎な評言だと思ったが、言いかえて妙とすべきかもしれなかった。

＊

いっこうに転校生が現れないまま、午後が過ぎてゆき、委員を担当しているるみなは“連絡協議会”に出席しなければならなかった。

“連絡協議会”というのは、要するに、警察と地域代表と教職者の三者協議委員が顔合わせをやるシステムである。十代を中心とする若年犯罪者層の増大傾向は、歯止めがきかない状況を迎え、三者の“連絡協議会”も、これといった有効な手段を持ち合わせているわけでもないが、しか





し武装警備員を、学校に配置するためには役立った。

ごく通俗的なヒューマニズムの観点から、少しでも急進的な政策に対して、常に大声で反対を唱える情緒的な声を抑えるには、実際に若年犯罪者の急激な増大とその被害に直面している国民層を、きめうしやう糾合する必要があったからだ。

なぜ両親初め、保護者代表が三者協議会に参加していないのか、るみなには理解できないが、一応、地域代表者が保護者代表を包含するといふことらしい。

今月は、博徳高校が「連絡協議会」の月番であり、会場を提供し、会合を主催することになっていた。若手教師のるみなはほとんど一手にその世話役を押しつけられるありさまである。

会合は、例によって警察側が牛耳る運びになり、最近激増したエログロ出版物の自販機問題をだらだらと論議した。最近では電子出版物と称される媒体が、エログロ出版物の代表格なのだから、自販機など取るに足りない、とるみななどと思う。ワールドワイドなコンピュータネットを介する電子出版の思い切り過激なエログロ出版物を野放しにしておいて、ありきたりな自販機のエロ出版物を形式的に取り締まって始まらないのではないか。

あまりにも偽善的すぎる。社会的なタガが外れてしまっているのに、形式論理で青少年の健全育成を、となえる連中が、まだ存在するのだ。

一時間半、青少年の間にこれまた激増した麻薬密売人間

題を巡って論議はだらだらと続き、十八名を数える委員たちの顔には覇気というものがまったくなかった。

結局、近代ヒューマニズムが問題なのだ、とるみなは思った。思ったが、口にする気にはなれなかった。端的に言えば、犯罪者の人権を、犯罪の被害者の人権の上位におくことを当然のこととするのが、近代ヒューマニズムだ。

すべての近代国家が、犯罪者によって篡奪さんだつされているのがその証拠である。一握りのテロリストが、全国民の死命を制する。近代ヒューマニズムはそれを奨励することはあっても、阻止することにはまったく役立たない。

そんなことはわかりきっているのに、口にだすのは徒勞だ。だれもが犯罪国家の凶暴な暴力の支配する檻の内に閉じ込められているのに。

末世なんだな、とるみなは、真黒の抹香臭まっしょういせりふを思い出して、妙な気分になった。あるいは常習的犯罪者たちですら、この末世の犯罪国家の内に生きることによって倦み果うているのかもしれない。

会合が終わると、るみなは城門教師を探そうとした。文句をいうためだった。今日の会合の世話役は、城門だったはずだ。その城門は、なすべきことをるみなに押しつけ、姿を晦くもましてしまったのである。

会合の記録を採り、文書化するのはもっと面倒なワークだ。会議室の後片付けは比べようもなく簡単な仕事だが、それは時間給で働く清掃係の手にゆだねられていた。

「ジョウを見なかった、リーミン？」

ジャージーを着た体育教師のリーミンは、感情のないきらめく眸でるみなを見た。

「知らないね。ジョウはサボリ屋あるよ」

木で鼻をくくる、という無愛想さを意味する表現がぴつたりな言いぐさだった。

「あなたなら、知ってると思ったんだけどな。文句をいつてやりたいことがあるの。心当たりがあったら教えてくれない？」

「ジョウはどこかにもぐり込んで昼寝しているね、たぶん。この間は、体育館の天井の上で寝ていたよ」

「まさか……」

笑うほかはなかった。

「まさかでないね。ジョウが一筋縄でいかない男であること知らないか？ あいつ、曲者くせものあるね。あんたの大切なもの、くすねられたいか、るみな？」

「くすねられて困るようなものって、あたし持ってないものの」

「あんた、男にもてる。でも、気をつけることね。CIRCULATIONされないように」

「CIRCULATIONって？」

一瞬、ぴんときななかった。

「REVOLVINGのことよ。廻すこと。大勢の不良生徒が相談してるの聞いたよ、るみな」

「ああ……廻すって、もしかして R A P E B Y T U R N S……輪姦のことなの？」

一瞬、ぴんときなかつたが、リーミンがきまじめな顔をしているのを見ると、いきなり気持ちが悪くなった。

「そう、輪姦、廻し。気をつけないと、るみな不良たちに廻されるね」

「それって、冗談じゃなくて？」

「この耳で、悪事の相談、聞いたある」

相手が本気なのがわかり、るみなは体が冷たくなるのを覚えた。

「当分の間、ひとりで行動しないことね」

「そんなこといったって……」

るみなは独身女性だ。いつどこで行動するにしても、単独でないことはない。

「あんたは付け込みやすいタイプ。やられても騒いだり表沙汰にしないと思ってるね」

「ご忠告ありがたいけど、あたしだって用心は怠おこたらないようにしてるから」

だが、それは虚勢に近い強がりだった。護身用の携帯非常ベルの類は、外出の際の必需品だが、奇襲を受けて、いきなり車に引きずり込まれ拉致らちされては役に立たない。

ただですら犯罪が頻発ひんぱつするなかで婦女暴行犯は日常茶飯事になってしまい、警察ですらなかなか重い腰をあげないのだ。

「当分のあいだ、学校休む、それいい考えあるね」

「ちよつと、リーミン。その下手な日本語をわざと使うの、やめてほしいんだけど」

「あたしが好きなように喋る、それいけないあるか？」

「だからね……今はちよつとそんな気持ちになれないのよ」

「ふん。せっかく親切に教えてやったのに……」

リーミンはその気になれば、最近の日本人よりよほど達者な日本語を駆使してのけられるのだ。御愛嬌あいきょうに見せ掛けているイングリッシュだって、もしかするともみなよりずっと上かもしれない。

「そんなことより、リーミン。どうやってそんな噂、聞きつけたの？」

疑惑をこめて、るみなが尋ねた。あるいはリーミンの口からでまかせの嘘に翻弄ほんろうされているのかしれない。

「わたしのいうこと、疑うあるか？」

「そうきめつけるわけじゃないけど、生徒たちが教職員の耳があるような場所で、そんな謀議を巡らすかと不思議に思ってた……」



「あんたは莫迦ばかか。校内管制室にきまつてるだろーが」
ぴしやりとリーミンのしつぺ返しを受けた。

「校内管制室……」

それは校内の情報収集を目的とするモニタービデオカメラと集音システムを、管制室とあざとく言い換えた諜報室

のことだ。教職員ですら立ち入りを認められず、その内実を知るものはごく少数の学校当局幹部だけである。

「だって、あんなとこ簡単に入れないじゃない!?」

「入ろうと思わないから入れないね。わたしは不良生徒たちの共同謀議を、はっきりと確認できたよ」

「リーミン、あなたって諜報部員？」

「ほほっ」

猫のような眸の中国娘は、なんともいえない軽侮^{けいぶ}の眼差しでるみなを見た。

「なんと賢い」

「莫迦にしないで。その校内管制室ってどこにあるの？連れてってくれない？」

「それは秘密。あんたは信用できない。だから、連れてゆけない、わかるか？」

「ああっ、教えられないっていうことは、やっぱり、口からでまかせをいってたんだ……そうじゃない？」

「勝手にそう思えば？ そんなことより、あんたが留守の間に、転校生らしい子が職員室にきていた。あんたがいないんで、もう帰ってしまったかもしれない」

「え、えーっ！」

今度こそ大声が出た。

「それを先にいってよっ！」

捨てぜりふより早く、足が勝手に動いて走り出していた。転校生の登校をるみなが待っているのを、職員室の全員が

知っているはずだ。もちろんリーミンだって例外ではないのだ。

必死になって走った。パールグレイのおニユーのスーツのことも忘れて疾走した。校舎の通路に溢れる生徒たちとばつちりを受け、怒りの悲鳴や金切り声の抗議を航跡のように曳^ひいて、職員室まで走り抜けた。

＊

やはり間に合わなかった。るみなが息を切らせて、職員室に駆け込んだ時には、転校生の姿はどこにもなかった。

「て、転校生、見ませんでした?!

職員室に居合わせた、八の字眉にふくれっ面の小清水教師に慌ただしく問い掛けた。

「なに?」

「ですから、転校生! 転校生を見かけなかったかって!」

「女生徒?」

その間延びした声音と、両^{まぶた}瞼がくつつきかけた眠そうな顔を見ていると、血圧が上がりそうな気がした。普段、恐ろしく難しそうな本ばかり読んでいくせに、いざという時にはまったく役に立たない男だと思った。

「女生徒って……ですから、転校生を見なかったかって……もういいですっ」

がらすきの教職員室の中を見回したが、居合わせるのは外国人教師ばかりで、これといって思わしい顔が見当たらず、身を翻ひるがえして外へ飛び出していこうとした。

「気ぜわしい……」

外の廊下の壁に背中中で寄り掛かって、リーミンが待っていた。

「何が気ぜわしいですか！ あなたがもっと早く教えてくれないから！」



「転校生、真黒といっしょに出掛けたよ」

ぎよっ、と思わず声が出てしまった。

「ま、真黒?! あなた、どうしてそれを知ってるのよ!？」

「生徒に聞いたよ。早く追いかけるほうがよいね」

「ど、どこへいったの?!」

るみなは頭は完全に飽和状態に達してしまった。ただ、台風のようなパニックの大波が荒れ狂うばかりだ。

「学校の外ではないか」

「学校の外って、どこ?!」

「広いよ。とても探しきれないね」

リーミンは明らかに、るみなをからかう楽しみに耽溺たんできしていた。

「占い師に尋けば？」

「もおっ」

リーミンなんぞに構っている余裕はなかった。あの真黒が、転校生を連れ去ったとなれば、博徳高校全体に大きな

ダメージをもたらしかねない事件の幕開けになる。

真黒は普通の非行少年とは、まったく異質な存在である。彼が、大きな反社会的グループのいわば端末であることを、全校のだれもが知っている。

「わたしがるみなだったら、転校生の住所を訪ねるね」

リーミンがまじめな顔でいった。

「担任の教師がいなければ、どっちみち自分の家に帰るね。明日また出直し。そうでないか？」

「わざと下手な日本語を喋るの、やめてったら！」

堪り兼ねて、るみなは大声をあげてしまった。これだけ思うさま翻弄されれば、世話はない。リーミンをその場に残して、またしても走り出す。

正門をめざして走ったのは、校外へ搜索を広げるつもりだったらしいが、素手のまま、一文無しだと気づいて、またしても方向転換、教職員室へ戻らなければならなかった。いずれにしろ、転出校から廻ってきた書類を確認しなければ、転校生の現住所すらわからないのだ。

教職員室のドアの前で、壁に寄り掛かったままのリーミンがげらげら笑った。

「おや、おかえんなさい。ずいぶんとお早いお帰りね」

るみなは思い切り中国娘を睨み付け、辛辣しんらつなことを言い返してやろうとしたが、くやしいことに、一言も口から出てこなかった。るみなは口達者なタイプではないのだ。

呪い文句の一言でも吐いてやればよかった。そう思うの

は、いつも証文の出し遅れになってからののだ……

ライオンヘアは嵐と道連れ



G e k k o M a j y u t s u D a n

そのライオンヘアの女生徒は、どこかの有名女子高の制服を着ていた。思い切りお洒落しゃれなセーラー服で、真紅のスカーフが胸元に結ばれているのが小粋だった。

すらっとした長い足の膝上までの濃紺のロングソックスと超ミニのスカートが、ショッキングな眺めだった。

若年者人口の急激な減少に見舞われた1990年代、私立高は制服のモデルチェンジを競った。

少しでも他校に差をつけるために、ファッションに極度に鋭敏な女生徒たちの気を惹く魅力的な制服を造りださねばならなかったからだ。

その女生徒が身につけている制服は、清楚せいそでありながら妖艶ようえんという、ショッキングな眺めを創造していた。

麦藁色むぎわらの頭髮はまさにライオンヘア――、さながら牡ライオンの豪奢なたてがみ、とても形容するしかない放恣ほうしなスタイルで、一昔前の厳正な校則のもとでは絶対に許されることがなかった。

間違いなくいえることは、彼女は自由服装制の博徳高校生徒たちの中にあつてすらも、強烈な磁力をもつて目を惹く存在感の持主だった。

どんなに派手な服装の女生徒も、存在感ではその女生徒の敵ではなかった。

だれひとり、彼女に声をかけようとする者はなかったが、それは余人にはない特別の存在感に圧倒されたからだろう。視線を一点に集中させながら、その女生徒は正門の間を

通り抜け、校外へと足を踏み出した。

彼女は、背後から大型バイクの排気音が迫るのを、少しも気に留めなかった。その無視の仕方は完璧であり、日常的にその種の攻勢に慣れきっていることを感じさせた。

漆黒の大型バイクで追い抜きざま、急ブレーキを軋ませて振り返った大柄な少年は、博徳高校の抱え込んだにがい苦の種だった。

真黒タケシは、フルフェイスのメットの下から防弾ガラスのような眼差しを、女生徒に向け、革ブーツの片足で大型バイクの車重を支えていた。

「おめえ、新入りだろ？」

モーターが唸るような感情のない声音だった。

「？」

女生徒はスペイン語とかポルトガル語のような、ラテン系の言葉で反問した。

「……Qui asunt es？」

「やめろ。日本語で喋れよ」

「Si？」

「やめろったら！ おめーが日本語ちゃんと喋れることはわかってんだ」

真黒が苛立たしげにいった。

「何か用？」

女生徒は猫の瞳を睜^{みは}って尋いた。瞳の燦^{きら}めきは異様に光が強く、真黒は眉根を顰^{しか}めて、気を入れて見返さなければ

ならなかった。

ガンをくれる、という威嚇^{いかく}にかけて、女生徒の持つ眼光の鋭さは並大抵のものではなかった。

「その調子だぜ……」

「用がないなら、さっさといきなよ」

強い口調になった。

「鬱陶^{うっとう}しいやつは嫌いなんだ」

「新入りに必要な情報を提供しようってんだぜ」

「必要ないよ。あんた、どんどん鬱陶^{うっとう}しくなってるよ」

「俺を雇えよ。損はさせねえから。おめーはヤバイことをしてるんだぜ」

「そんなの、百も承知だよ、おにいさん。あんたがそのヤバイやつの筆頭だろ」

ライオンヘアの女生徒は、紅い恰好^{かっこう}のいい唇でにっと笑った。

「あたしは何の心配もしてないよ。心配しなきゃならないのは、あんたたちヤバイ連中のほうだから」

「演技が達者じゃねーか」

真黒はフルフェイスのメットを脱ぎ、防弾ガラスの目つきをやめて、女生徒をまっすぐに見つめた。

「演技って？」

「おめー、いいところのお嬢さんだろ？ コワモテでズベツてるふりしても、はくいお面に全然傷痕がないところを見ると、相当無理してるってわかるぜ」

「傷がすぐに治る体質でね。あたしにかかわり合おうっていうなら、不死身の延命処置を受けてからにしろよ」

「おめーはよ、つつぱる場所と相手を間違えてるんだよ」

「麻薬密売人風情が生意気な口を叩くんじゃないよ」

女生徒は無表情な顔でいった。

「学校で尋けば、あんたの素性はだれだって知ってるじゃないか」

真黒は大きな侮辱^{ぶじよく}を女生徒に受けたにもかかわらず、表情を変えなかった。

「だとしても、同じことをいうしかねーんだよ。場所と相手を間違えてるっていうのは、嘘じゃねー」

「へえ。見かけによらず、下手に出るじゃない」

「必要なら、いくらでも下手に出られるんだよ」

「それじゃいつとくけど、どつかのお節介なおばさんが、警察呼んでるよ。おっきなバイクにのった悪い暴走族が、女学生を脅してるってね」

「ゾクなんかに関わりあったことはねーよ」

「それが事実でも、世間ではそう思わないわよ」

初めて真黒のクールな態度に苛^{いら}立たしさが表れた。

「おめーは今、えらくヤバイ立場にあるんだ。それを教えてやるーとしたのよ」

「自分を雇えといったのは、どういう意味さ？」

「ギャラを払えば、ヤバイ目にあわずにすむってわけ」

「保護料？」

女生徒が冷笑を真黒に浴びせた。

「自作自演で、ヤバイことから保護してやるから、ギャラを払えって？」

「そんなのじゃねーよ。おめーは本当にヤバイ羽目にはまってるんだ」

「信用しろというほうがムリだと思わない？ あたしはこう見えてもスレッツカラシでさ。保護料ウンヌンというテクニクの裏表知ってるんだ」

「おめーがスレッツカラシだって？ ライオンヘアしてブラフかけてたって、因幡いなばのシロウサギみたく見えるぜ。背伸びしないで、オレを雇えよ」

「いくら？」

女生徒は侮りあなづを通り越して、真黒に興味を抱き始めたようだった。

「月に十万……おめーなら二万に負けといてやる」

「正気じゃないね。保護料なんて、そんな金払うやつがどこにいるのよ？」

「おめーはかならず払うよ。ヤバイ目に遇あえばな。けど、それだと間に合わないかもしれねーぜ」

「払えば、そのヤマハのバックシートに乗せてくれる？」

「保護サービスの一部だからな」

「わかった。でも、あたしは気が変わりやすいよ。最初のことわっとく」

女生徒の気まぐれさは、驚くべきものだった。その光の

強い瞳は、完全に真黒を呑んでかかっていた。

大柄で逞たくましく、危険な雰囲気、手で触れるほど濃厚に全身に孕はらんだ不良少年をものともしない大胆さだった。

「いいから、早く乗っかれよ」

真黒の胸中がどうであろうと、態度はますますクールになった。

「ヤバイ状況はちつとも変わらねーんだからよ」

女生徒は身軽だった。同じ年齢の娘の持つ鈍重さとはまったく無縁な動きで、風のように、真黒のバックシートに飛び込んできた。

セーラー服のミニスカートの裾から太腿の大半が露出することを、気にもとめていなかった。

「なにしてんの？」

女生徒がいった。真黒は、その動きの素早さに幻惑されたように、咄嗟とっさに反応できずにいたのである。

「早く出せば？」

しかし、真黒がたじろいでいる間に、邪魔が入った。

「ちよっと待った、クロ！」

その甲高い声音は、やはり女生徒と同年令の女の子のものであった。

＊

「なにやってんだよ、クロ！」



するどい譴責けんせきのこもった声音だった。

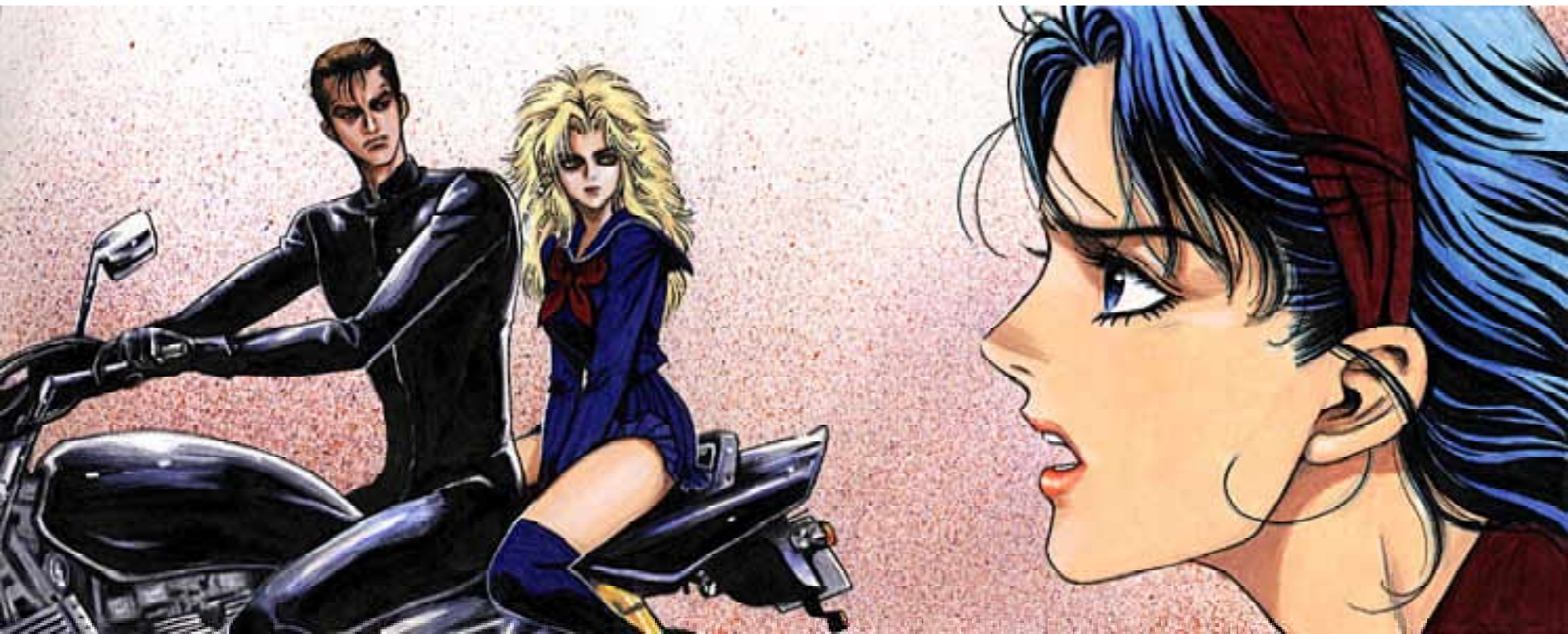
女生徒と真黒は同時に体を振よじり、大型バイクの後ろを振り向いた。

軽快な動力補助付きのバイシクルの女生徒が、目に飛び込んできた。虹色の彩色を施されたスマーтонаバイクが鮮やかだった。

目を怒らせて真黒を睨み付けているシヨートヘアの女生徒は制服姿で、滅多に見かけない臙脂色えんじのセーラー服が、目を奪うものがあつた。

「その子をどこに連れて行くんだ?!」

「おめーの知ったことじゃねーだろ、人ひと



美^み」

「馬鹿いつてるんじゃないよ。その子は同級生なんだよ。転校してきたばかりだけど、もうレッキとした同級生なんだ！ おまえなんかの勝手にはさせられないよ！」

ショートヘアの女生徒の口調はいささかも遠慮がなく、一方的で激越だった。しかし、真黒は怒らなかった。

真黒のように、筋肉量でも闘争力でも群を抜いたマッチョそのものの少年が、たかが強気だというだけで、女生徒にたじろぐなど考えにくいものがあつた。

「クロ、その子を下ろしな！ 早く！」

「お客さんの意向を尋けよ、人美。俺は無理にとはいってねーよ」

真黒は珍しく、薄笑いを浮かべて嘯^{うそぶ}いた。表情の乏しい真黒にしては、劇的な表情の変化とでもいうべきだったろう。

「この子は、俺のお客さんだからよ」

「何がお客だ。麻薬を売りつけてジャンキーを作ろうとしてるくせに！」

「いつとくが、俺が提供するのには、保護サービスだからな。危ない連中がうじゃうじゃいるんだ。後ろ指さされるビジネスじゃねーぜ」

「危ない連中の筆頭がおまえじゃないか！ さっ、あんた、さっさとそいつのバイク、下りたほうがいいよ！ ヤクを嗅がされてゾンビになりたくなかったらね！」

「……………」

ライオンヘアの女生徒は、ヤマハの大型バイクのバックシートから体を振って、背後のバイシクルに跨またがったシートヘアの女生徒、人美をじっと凝視していた。猫の大きな瞳がきらきらと燦めいた。

「どうすんだ、早くきめろよ」

真黒が面倒くさげにいった。

「女の気まぐれに付き合っていられねーよ」

「行って！」

ライオンヘアの女生徒がいった。

「あ、馬鹿！ 本気かよ!？」

「いいから、行って！」

「わかったよ」

真黒はどこか優柔不断だった。

「やってみろ！ 承知しないよ、クロ！」

「しょうがねーだろ！ クライアントの要望なんだからよ！」

言下に真黒は大型バイクを発車させた。

「ちくしょう、逃がさないからな！」

シートヘアの女生徒は、スリムなバイシクルで猛然と後を追った。いかに動力補助のついたバイシクルでも、リッター級の大型バイクの敵ではないと思われたが、生憎あいにく道路は混雑しており、歩道をつっ走るバイシクルは圧倒的に有利だった。

人美は立て続けにクラクションを鳴らしながら、ヤマハを追いつ込んだ。相手は人美同様に歩道へ乗り上げなければ、逃げきることは不可能だった。

当然のことだが、歩道には人がいて、小回りのきくバイシクルのように、大型のヤマハが突破するのは困難で、特に高齢の老人が何人も群れているとなると、ヤマハは警笛で脅して追い散らすのは無理とみきわめ、停止せざるを得なくなった。

シヨートヘアは素早かった。バイシクルでヤマハに擦り寄ると、攻撃をかける蛇のように手を閃^{ひらめ}かし、ヤマハのイグニションキーを抜き取ってしまった。

奇襲を予想していない限り、巨体で歩道に乗り上げて立ち往生したヤマハでは、手の打ちようがなかったろう。

「武装解除……」

指先にイグニションキーのキーホルダーをひっかけてクルクル廻し、シヨートヘアの人美はにっと笑った。

「さっ、どうする、クロ？」

「わかった。おめー相手に揉めるのは御免だ。クライアントには悪いが、下りて貰う」

「契約したんじゃないの？」

ライオンヘアの女生徒が抗議したが、本気のように見えなかった。

「悪いが、解約だ。相手が悪い。こいつは独り生徒会とか歩く生徒会とかいわれてるうるさいやつだ」

「ふうん。見かけ倒しなんだね、あんた」

「下りてくれ。ゴタゴタいつてる暇はねーんだよ」

「甲斐性なし！」

ライオンヘアは身軽に大型バイクから飛び下りた。制服のミニスカートがひるがえり、パンティが見えることなど、気にもかけなかった。

「とつとと失せな！」

かわいらしい紅い唇からたんか啖呵が吐き出されるさまは、ちよつとしたみものだった。

「もう二度とその面、見たくないね！」

「その人美というやつがわかれば、考え直すぜ」

飛んできたキーホルダーを空中でキャッチし、真黒はやマハをそせい蘇生させると、車道へ飛び出し、そのまま排気音だけ残して去った。

「あいつをな嘗めちゃいけないよ、クロっていうんだけどね。二重人格だよ、あいつ。バイニンなんだ、わかる？」

「二重人格？ どっちに転んでもワルなの？」

ライオンヘアは不機嫌そうにいった。

「それが本当にわかってる？」

「よっぽどのお節介だね、あんたは」

頭を一振りして、ライオンヘアの女生徒はきつい目つきで人美をにら睨んだ。

「正義の味方ってわけ？ そーゆーの、あたし苦手なんだ」

「お節介だってなんだって、見逃せないことは見逃せない」

「そういえば、昔流行ったな、このフレーズ。小さな親切、大きなお世話ってね」

「知らないな、そんなの。あんたよっぽどとし食ってる？」

「あんたよりはずっと若いよ、間違いない」

ライオンヘアはくるっと人美に背中を向けた。

「後ついてこないで。もうお節介はたくさんだから」

「そうは行かないみたいだよ」

「いい加減にして！ 承知しないよ！」

ライオンヘアの目つきが更にきつくなった。だが、人美はいっこうに平気だった。

「早く後ろに乗りなよ」

「こいつ、何をいってんだよ！」

「力づくで乗せるわけにも行かないけどさ。さっきお節介なおばさんがポリス呼んでたから。パトカーの中に連れ込まれてスケベなポリスどもにしつこく事情を尋かれたい？ あんた結構な美人だし」

「ん？」

振り向くと、パトカーが停まり、ラウドスピーカーがなりたてるところだった。

「その女学生！ 歩道にいるふたりづれの女学生！ 止まりなさい！」

「わかったわよ！」

ライオンヘアは身軽に、人美のバイシクルの荷台に飛び乗ってきた。

「やって！ どこへでも！」

「そうこなくちゃね！」

なおもラウドスピーカーでがなりたてるパトカーを尻目にかけて、二人乗りのバイシクルは猛然と歩道から混雑した車道に飛び出し、強烈なＵターンを無理やり強行すると、対向車線へしゃにむに割り込んだ。

パトカーは身動きもとれずに、対向車線側の歩道に躍り出たバイシクルのふたりの女生徒が瞬く間に姿を消すのをあっけにとられて見送った。

＊

「けつ痛くない、あんた？」

人美が尋いた。さすがに顔がうつすらと上気して、汗が首筋に光っていた。セーラー服の胸元を引っ張って、風を入れる。

「痛くない」

「へー。よっぽど頑丈に出来てるんだね、あんたのけつ」

人美は手を延ばすと、ライオンヘアの女生徒の制服のスカートの上から、ヒップを触った。弾力のある尻のまるみを、掌で確かめる。

「ほんとだ。けっこう筋肉質なんだ」

つめたい目で、ライオンヘアは人美を凝視していた。

「おまえって、そーゆー趣味があるのか」

「そうでもないけど、男でも女でも、均整がとれて、きれいな肉体ってあるじゃん。そーゆーのを見ると、ちよつと触ってみたくなるんだ」

「気持ち、いいのか？」

「うん。気持ちいい。古代ギリシャって、男女を問わず肉体派じゃない？」

「そうか」

ライオンヘアはいきなり手を延ばすと、人美の避けようのない素早さで、制服の胸の隆起をがしつと掴んだ。

「気持ちいいか？ 乳揉んでやろうか？」

「気持ちいいこと、してくれるじゃん」

「ちっこい乳だな。手触りはいいけど」

「これでもCカップなんだけどねえ」

「勝った。あたしはDだ」

「いい加減にしろよ。気分が出てきちゃうだろ」

人美は相手の手首を握ったが、さほど力はいちめなかつた。
「目が潤^{うる}んでるぞ。だけど、責任は取らないからな。あた

しはノーマルだから」

「人の乳揉んどいて、なにいつてやがる」

「尻、撫ぜられたお返しだ」

人美は抑制できない笑いの発作が体を痙攣^{けいれん}させるのを覚

えた。

「おまえって、変なやつだな」

「それはおまえのことだろうが」

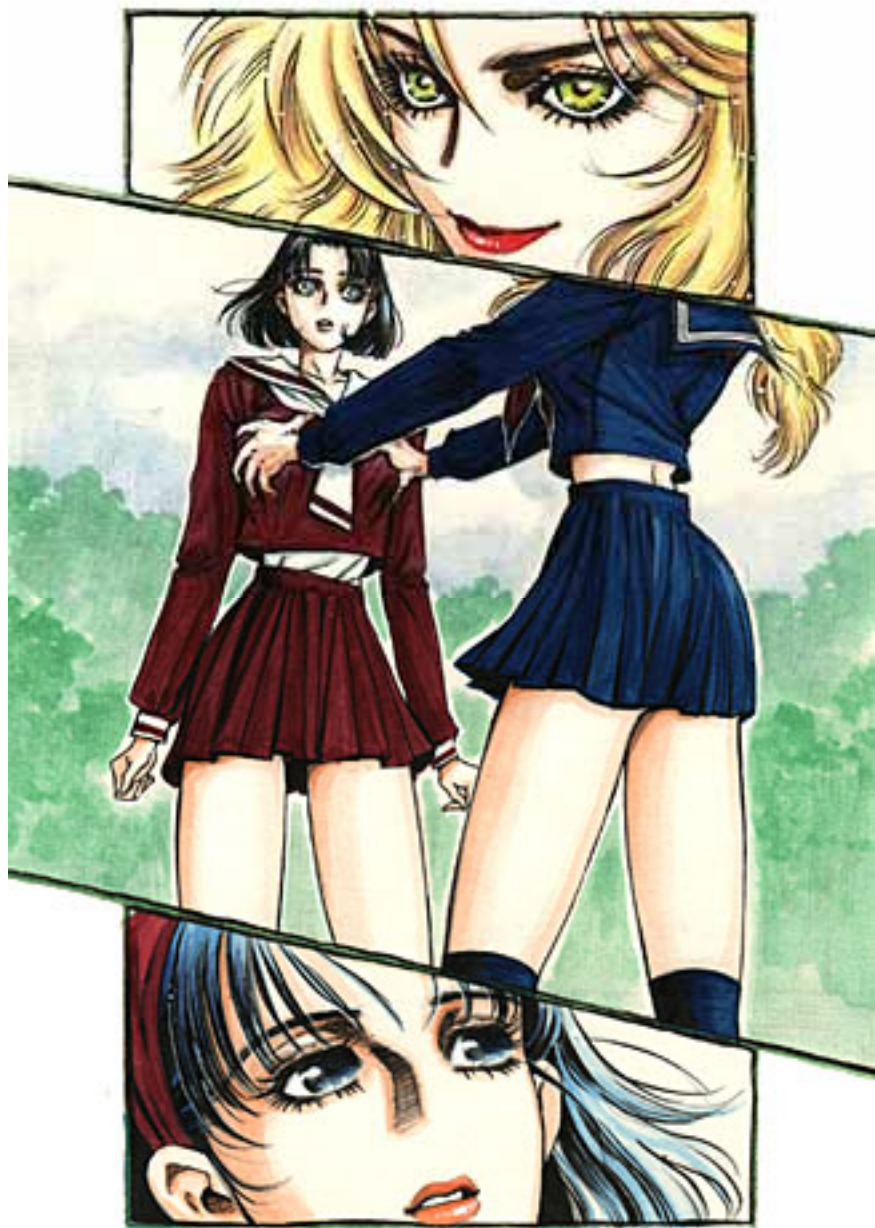
人美と同じような笑いの衝動が相手を捕らえていた。体の痙攣が伝わってくる、もう歯止めがなくなり、ふたりの少女は狂ったように笑いの発作に身をゆだねた。

笑い疲れるまで笑い、ふたりは公園のベンチにぐったりと腰を下ろした。午後の公園は物憂い静寂に包まれており、リタイア老人の姿ばかりが目立った。

「こんな時間に、公園なんか初めてだな……」

人美が呟いた。

「あたしだって。おまえに無理やり連れてこられなきゃ



な」

ライオンヘアは鬱陶しげに長い頭髪をかきあげ、前かみになって両肘を膝の上についた。笑いの発作の後の虚脱したようなむなしさを覚えているようだった。

「あーあ。胸の中がからっぽになっちまったよ」

「アンニユイになってるんだ？」

「そんなごたいそうなもんじゃないけどさ。学校って、どこいっても退屈だよな」

「だから、クロみたいな危ないやつ誘いに乗ったわけか？」

「あいつが危ない？ あたしのほうがよっぽど危ないよ。おまえも、あたしなんか目をつけなきゃよかった」

「あんたのことがなんとなく気になってね。やっぱりお節介だよな」

「クロってやつ、おまえに一目置いてるけど、なぜだ？」

「幼なじみ。クロってちっちゃい頃はいじめられっ子でさ。ワタシがいつもカバーしてやったんだ」

「おまえは、ちっちゃい頃、いじめっ子だったろ？」

「そんなことなぜわかる？」

「心の傷だな。トラウマってやつ。おまえのお節介はそこに起因してる。違うか？」

「あんたもいじめられっ子だったのと違う？」

人美はまじまじと相手の顔を覗き込んだ。ライオンヘアはそっぽを向き、人美の視線を避けた。

「退屈だよ、おまえのいうことって」

「それって、ワタシのせいかな？」

「世の中、どこいってもリタイアした年寄りだらけでさ。

鬱陶しいよ」

「そうかな？　ワタシには、あんたが本気で退屈してるようには見えないんだけどな」

「おまえ、退屈してないのか？」

「してないみたいだ。だって、あんたみたいな突拍子もない新人りに出会えるし」

「おまえ、自分のこと鋭いって思ってるだろ？　勘が鋭いって」

「それはよくいわれる。ウチのおばちゃんも勘が鋭くてね。靈感があるんだと言われてた。ウチはそんな家系みたい」

「やめとけ。不幸になるぜ」

「やめとけといわれてもな。こればかりは自分の自由になるわけじゃないから……」

人美は苦笑いした。自分が、どんどん意図せぬ深みに嵌まり込んで行くのを自覚していた。

「それで、あたしに目を付けたってわけだ」

「ただ、気になったただけだよ。迷惑だったみたいだね」

「それだけかい？」

「それだけ。他に何かあるっていうのよ」

「それはどうもありがとさん。おまえ、生徒会長かと思っ

たよ」

人美はにっと笑ってみせた。

「実をいえば、そうなんだ。図星だよ。独り生徒会とか歩く生徒会とか呼ばれてる」

「嘘だろ？ 馬鹿じゃないの、おまえって」

「本当だよ、神様に誓って……」

「いまどき生徒会長だって？ おいおい、っていいたくなっちゃうね」

「そうかもしれないけど、しょーがないだろ？ なにしろ立候補者がひとりもいなかったんだから」

「それで投票したら、おまえが悠々と無競争で当選したわけか」

「笑うなよ。天下無敵のお節介焼きだと思ってるな？」

「おまえってつくづく変わってる」

「そう思ってるよ。男生徒はバイニンだらけ、女生徒はバイシュンだらけ。でも、どこの学校だってみんなおんなじだよ。地球全体、世界中が^{たが}籓が外れちまってるんだ。だれも生徒会長なんかやりたがらないよ。どうせお座なりの名目だけなのに、時間はやたらに食われるしさ。仕事は沢山あるしさ。生徒会の役員なんかみんな逃げるから、結局ワタシひとりで背負い込むことになる……」

「むだむだ……それなのに、なぜ無理するのさ？」

「馬鹿だから、そういたいんだろ？」

「意地か？ 人美、おまえってつくづく意地っ張りなんだ

ろ？」

「今、人美って呼んだ？」

人美にストレートに顔を覗き込まれて、ライオンヘアは戸惑ったようだった。

「呼んだよ。それがおまえの名前なんだろう？」

「うん。人美って呼ばれてびっくりした。ちよっと嬉しかったな」

「なんで？」

「だって、クロがいったことを、あんたは憶えてくれたから」

「おまえって、感激家なんだな」

ライオンヘアは本気で感心しているようだった。

「腹減ったな。飯食いにいこうか？」

唐突に話を切り上げて、ライオンヘアは立ち上がった。

あつけにとられて、人美は彼女を見上げた。変幻、という表現が、この女生徒には似合っていた。

「ね。ワタシはあんたを何と呼べばいいんだ？　ライオンヘッドっていうのはどお？」

「それって獅子頭ししがしらじゃねーか。おまえって結構意地悪いところあるな。メイだよ」

「だったらミラーライオン」

「なんだ、それ」

「歌舞伎の鏡獅子を直訳した。メイって何？」

「あたしの名前。漢字で明って書いて、メイって読むん

だ」

「へえ。漢字で明だけだと、男だか女だかわかんないね」

「飯食いにいこ。ああ、ものすごく腹減っちゃったよ」

「どこへ行く？」

「おまえにまかせるよ。ここの原住民なんだろう」

「原住民って言い方あるかよ。だったら、あんたは何者なんだ？」

「渡り者……それとも流れ者かなあ。ともかく放浪者ってわけ」

言葉とは裏腹に、ライオンヘアのメイはバイシクルを押し歩きする人美の前に立って歩いた。その後ろ姿を見ているうちに、人美は奇妙な眩惑感の虜とりこになった。

こいつ、ほんつとに変わったヤツだ……

わけのわからないところがある。はつきりと言葉にすることがむずかしいが、本当の自分を隠しているというか。人間関係において、ポイントを巧妙にはずす術に長けているみたいだ。自分の本心を巧みに隠しながら、相手の本心を引き出す……

だけど、なぜそんなことをする必要があるんだろう。もともとの性格だろうか。それとも何か、隠さなければならぬことでも持っているんだろうか？

「ちょっと待って、メイ！ あんたの上のほうのな前は？ ファミリーネーム」

「人に名前を尋く時には自分からまず名乗れよ」

「わかった、ごめん。鷹垣たかがきっていうんだ。鷹垣人美……」

「わたしは犬神だよ。犬神明……おかしいか？」

不思議に透き通った瞳が、振り返って人美の顔をじっと見据えた。

「うん……ちょっと珍しい姓名かなと思って」

「あまり人にはいいたくないね。かならず妙な顔つきをされるから。男の名前みたいだろ？ アキラって呼ぶヤツもいるよ。でも、よっぽど気に入ったヤツでないと、そんな呼び方はさせない」

けっこう気難しいんだ、と思ったが、人美は黙っていた。
「だったら、ワタシはメイでいいよ」

「なんで？」

強く張った瞳で睨にらまれた。こいつ、眼技が使えるんだ。でも、すごくきれいな瞳をしてる。なんだか胸がときどきしてきた……ワタシ、こいつの瞳にいかれちゃったみたいだな、と人美は思った。

「ワタシ、あんたに気に入られてるっていう自信なんかないもん」

「そうか」

くるっと背中を向けて、メイは足早に歩きだした。こいつ、気を悪くしたのかな、と思いながら、人美は慌てて後を追った。バイシクルに乗ったほうがいい、と気づくほど、メイの足取りは異様に速かった。

「待ってよ！ あんた異常に足が早いんだね」

自分がなぜか、ひどく下手に出ていることに気づいて、人美はショックを受けた。こんなことは初めてだ。

このライオンヘアのメイに出会ったことで、自分は何にか急激に変化したような気がする……男の子にだって、こんな弱気な気分になったことは一度だってないくらいだ。

＊

「メイ、あんたってとっても健啖家けんたんかなんだね」

中華料理店を出た時の人美は、げっそりしていた。本当は、もっと端的な評言を使用したかった。

——あんたってものすごい大食いだね……

だが、それを口にしたら、ライオンヘアが気分を損ねるのではないか、と気をつかったのだ。

メイは見たところ、人美自身といい勝負で、身長164、体重45といったところだ。それがいったん、中華料理店のバイキングの取り皿を手にとると、人美がげっそりするほどの食欲を発揮する。

テーブルとバイキング料理の大皿群の間を、何回往復したかわからない。最初は数えていたが、しまいにはその気も失せた。

「あたしって、時々食欲がすごく亢進こうしんするんだ」

メイは人美のいうことを気にもとめなかった。

「いつも、こんなに食べるわけじゃないよ。一カ月のうち、

特定の期間だけ。びっくりした？」

「うん。少し……」

正直言えば、少しどころではなかった。

「少し？ 神に誓って本当か？」

「そんな、大袈裟^{おおげさ}。でも、びっくりしたのは事実。そんなにプロポーションがいいのに、どこにあれだけ食べたものが入っちゃうのかなあと思って」

「そういう目で見られるから、他人と食事するのは嫌なんだ。バケモノみたいに思われるから……でも、しょうがない。あたしの体が要求するんだから。でもさ、普段はびっくりするほど小食なんだ。大量に食べるのは、月のうちほんの一週間だけ。信じないかも知れないけどね」

ほんの一瞬だけ、メイは真面目腐った顔つきでいった。

「他人に見られると、目茶滅茶に言いふらされるからね。

牛一頭、平らげたとか」

「ワタシはそんなことはいわないよ。よく食べるんだなあ
と思っただけ」

「正直に言えよ。バイキングでよかったって」

「うん。バイキングでよかった」

メイは弾けるように大声で笑いだし、どすんと人美の肩をひっぱたいた。その力は尋常なものではなく、人美はその場にぐしゃりとひしゃげるのではないかという気がしたほどだった。

「なんだ、大袈裟なやつだな」

がしゃっとバイシクルを倒して、人美は呻きながら、その場にしゃがみこんだ。冷やかすように覗き込む相手を恨めしい気分で見上げた。

「まったく、なんて馬鹿力なのよ。見ろ、鎖骨が折れたぞ」

「おい、ほんとか?! 嘘ついたな、こいつ」

人美につられて、その場にしゃがみこんだメイは、歩道の大衆が物珍しげに眺めているのを知り、飛び上がるような勢いで立ち上がった。

「だいたい大袈裟なんだよ、おまえは! ついつい本気にしちゃったい!」

例の早足で歩きだされると、人美もその場にうずくまっ
て恨めしい気分に浸っているわけにも行かなくなった。

横倒しのバイシクルを引き起こす時、ずきっと叩かれた側の肩や背中に痛みが走ったが、我慢するしかなかった。メイはその間も異様な速歩で、歩き去ることをやめなかったからだ。

「ちよつとお。被害者はワタシなんだから、そんなに怒ることないでしょーが」

「怒ってやしないよ! でも、あんまり大袈裟で、衆目を惹く意図が見え見えだから」

「衆目を惹く? 冗談でしょ。あんたがこんなに怪力娘だとわかってれば、最初からもっと用心したわよ」

「だから、あたしにかかわり合うと不幸になるよと警告し

たじゃないか！」

ライオンヘアの肩が怒っていた。

「もっと具体的にいつてくれればよかった。それなりの対応があったのに」

「こんな目にあっても、まだあたしにかかわり合う気か？ いっとくけど、これくらいじゃ済まないよ。とにかく警告はしたからね」

「わかったわよ。まだ何か注意事項があったら、早めにワタシに教えといてね」

バイシクルと競争するような速歩の勢いが鈍った。

「あたしに付きまとして、不幸になるのがそんなにお望みなら、しょうがないね。でも、以後、絶対に大袈裟に騒がないと約束して貰いたいもんだ」

「可能な限り、ご要望に応じます……」

「ほんとに変なやつ」

とうとうメイは笑いだして、足を停めた。

「好奇心を満足させるまでは、あくまで付きまとう気か？」

「そういうわけじゃないけど、生徒会長として、新入生が十分学校に適応するまで、責任感を覚えるから……」

「珍しいやつだな。そんなの、この末法の世に、博物館物だぞ。正直に言え。付きまとう理由は好奇心だと。それ以外にあるわけじゃないじゃないか」

「だってさ……男女の間でも、一目惚れとかあるじゃん」

「前にも言ったとおりあたしはノーマルだ。レズの女の子のお相手はできないよ」

「そうじゃなくて……外で出会った犬とか猫とか、いきなりなつかれちゃうことだってあるし」

「あたしは犬なのかい」

「運命の出会いってあるじゃない？ 理由はないけど、やたらに気になって仕方がないとか、無性に心を惹かれるとか……」

「そんなのは、おまえの手前勝手な言いぐさだ」

手厳しい言い方だった。

「だったら、何らかの化学反応だよ。エンドルフィンとか脳内化学物質のせいだ」

「ものには言い方があるもんだな。でも、たとえば化学反応だとしても、おまえに付きまとわれるいわれはない。あたしはおまえに借りをつくらないし、貸しもつくらないからな。あくまでもファイフティ・ファイフティだ。何が起こったとしても、おまえが自分で始末をつけろよ」

人美を凝視するメイの瞳の色は、まるで敵意に満ちて挑みかかる猫の瞳のようだった。ぞくつと寒けが身裡を走った。

「貸しをつくる気なんかもとないし。メイが新しい環境に適応するまで、いろいろ助言を、なんて思っただけ」

「よし。その言葉、忘れるなよ！」

鳥肌が立つような心地がした。とてつもない形容である

ことはわかっているが、人美は自分が二度と解約できない契約を、メイとの間に結んだような気がしたのである。

「なんだかさ……悪魔と契約したみたい」

「悪魔？ 案外そうかもしれないわよ」

メイはきびしい瞳の色のまま、にっと笑って見せた。

「だったら、おまえの運命はもう決まったね、人美」

「後で後悔して、契約を取り消してと泣きつくかも……それはともかくとして、ワタシのウチにこない？」

「なんだ、それはご招待ってことか？」

メイはいかにも意外そうに眉を顰めた。

「そんな嫌そうな顔しないで。とにかく、ウチへおいでよ。学校について、いろいろと助言してあげたいことだってあるし。ワタシはマジだよ」

「だいじょうぶだな？ 何かの罠じゃないな？」

「何いってんの。バイシクルの後ろに乗って」

「しょーがねえなあ」

しかし、メイは不承不承、言われる通りにした。

＊

唐突で異様な、しかも不気味なところのある天候の急変だ、と龍沼るみなは思った。

周囲の光景は、頭からすっぱり紗しゃのヴェールを被せられたようにみるみる薄墨色に暗くなり、叩きつけるような大

粒の雨が猛烈に降りだした。

もちろん、傘の持ち合わせなどではなくて、手近な商店の軒下に駆け込んで、熾烈しれつな勢いで吹き荒れる驟雨しゅううが過ぎ去るのを待つしかなかった。

軒先を借りた商店は、見るからに古ぼけた看板に“かさはきもの”と記された赤いペンキがあちこち剥落はくらくしていた。 “かさはきもの”の看板を掲げた店は、固く埃ほこりで汚れたシャッターを締め切っているのが生憎だった。

休業中ではなくて、もしかすると廃業してしまったのかも知れない。

今日は、このまま帰ってしまったほうがよいという神の御告げではあるまいか、と勝手なことを考えだした頃、目の前に空車札を出したタクシーが通りかかった。

僅かな間に、頭からシャワーを浴びたように体が濡れそぼってしまった。タクシーの到来は神の助けだった。

あらかじめ

予め用意しておいた、簡略な地図をタクシー・ドライバーに見せると、車は約百メートル走って、大きな建物の前に停まった。

「近すぎて、悪いみたい」

ひどく皺の多いドライバーは、残り少ない白髪しらげの頭をボールペンの尻で搔いた。なにか気掛かりなことでもあるように躊躇ためらいがちだった。

「でも、助かりました。この雨だもの」

るみなは素直に感謝を表明した。全身が肌着を通すまで

雨でずぶ濡れになるところを免れたのだ。

「このマンション、入居者が極端に少ないみたいだから、気をつけなさいよ」

タクシードライバーは親切心なのかどうか、脅すようなことをいった。

セキュリティに問題あり、というのが一目でわかるマンションだった。外来者が簡単に内部に入れるのだ。

るみな自身、検問に出会うことなしにあっさり入り込んでしまったのだから、だれでも侵入できるのは事実だ。

管理人室は無人で、常駐しているのかどうかも疑問だった。照明は節約のためか薄暗く照度を落とされ、空気が冷たく淀んでいた。

突然の驟雨に衣服が濡れているので、体がじつとりと冷たく、風邪を引く絶好のきっかけになるのではないかと気になった。

奥まった壁際に並んでいるメールボックスは、ちらしが乱雑に突っ込まれており、住人が数少ないという印象を受けた。

どう見ても、好意を持てる住居ではなかった。凶悪犯罪が横行する世相なのだから、タクシードライバーの忠告が不気味に甦ってくるのも無理はない。

念のために、バッグの中に手をつ突っ込んでセキュリティ必携品を確かめた。携帯非常ベル、必殺痴漢スプレー。スタンガンは相手に奪われると、自分が被害者になるケー

スが多く、るみなは持ち歩かない。

相手に気づかれないうちに所持するのは、やはり口紅ケースサイズの痴漢スプレーに限る。

しかし、これもスプレーの噴気孔の向きを間違えると、自分がてひどい目に遭うことになる。

エレベーターのケージ内部は掃除が行き届かず、汚れが目立った。性的な落書きがケージの壁に踊っていた。

常套的^{じょうとうてき}で幼稚な落書きだが、昔の落書きに比べると、変に攻撃的なメッセージが目立つようである。

——このエレベーターの中でオレは女を三人強かんしてやったぞ

そんな落書きである。

——次のひがい者はおまえだ!! そうだ、いまこれを読んでいるおまえだよ!

ありきたりだが、るみなにとってはタクシードライバーの忠告が、ずしんと現実的になるような落書きだった。

今更のように、バッグの中のセキュリティ・グッズを確かめたくなった。キャッシュカード・サイズの携帯電話を兼ねた電子機器は、緊急ボタンをプッシュするだけで、110番に繋がる。

念のために、バッグから取り出して、シャツブラウスの胸ポケットに押し込んだ。緊急事態で、バッグを奪われるケースが多い、とセキュリティの講習を受けた時に、記憶に刻み込まれている。

携帯非常ベル、痴漢スプレー、ポケットフォン、全部バッグごと強奪されては、なんのために日頃持ち歩いているのかわからない。

18階に昇るまで、昇降客は一切なかった。この際、それが望ましいことになった。男と二人きりでケージに閉じ込められるのは、絶対に愉快なものではあり得ない。

それにしても、生活音のないマンションであり、エレベーターに乗る間も降りた後も、物音ひとつ聞こえなかった。エレベーターを降りると、改めてマンションが巨大だという認識が深まった。容れ物が異様に大きいのに、居住者は極端に少ない。夜間はともかく日中はひと気がなくなる。まるで、ゴーストタウンだ。

通路に出ると、まるで巨大ホテルのように両側に部屋のドアが並んで延びている。通路にひと気のない大ホテルは、不安な気持ちをもたらすものだが、この場合はまったくそれものにならなかった。

るみなはすっかり心細くなって、右手をしつかりとバッグに突っ込み、危機に対応できる態勢を調えながら、手近の部屋番号を読み取ろうとした。

背後に気配を感じて、心を寒くしながら素早く振り向く。非常階段の黄色い鉄扉が開かれていて、灰色の大きな影がずっと動き、消えるのを目撃したような気がした。

そんな気がしたのであって、確かに目撃したのではない。しかし、全身が氷漬けになったように冷たくなり、動悸が

荒々しく胸郭の中で暴れていた。

目の錯覚かもしれないなかったが、そうは思えなかった。その場でくると方向転換して、そのままエレベーターに駆け戻るのがもっとも正しい選択だった。

しかし、たかが目の錯覚に恐れをなして、今までの激しい吹き降りの中で味わった苦労を、無為にするのはなんとしても業腹ごうはらだった。

性格的にいっても、るみなは物事に執着する傾向があり、偏執的と親しい友人は遠慮なしに彼女を評した。

せつかくここまでたどり着いたのだから、不在でもいい、転校生の部屋を確かめるだけでもしておかねば気が済まない。

番号の流れを調べ、転校生の部屋ナンバーが通路の突き当たりにあることを確認した。よりによって、エレベーターや非常階段とはもっとも遠い位置だ。

心理的に萎縮いしゆくしているためか、つい足音を忍ばせて歩く気分になった。駆け足で用事を足せばいいとわかっているのに、心が金縛りにされているようだ。

この無人地帯のような巨大マンションの不吉な雰囲気によって、心を縛られてしまったに違いなかった。

ルームナンバーは1805で、通路の突き当たりの角部屋だった。そこまでたどり着くと、やっと息が付ける気分になった。

もうこんな思いをするのは、二度と御免だと思いながら、

ドアのチャイムを鳴らす。

空虚な沈黙だけが応えた。ちよつと間を置いて、三回鳴らしたが、変化は生じない。

念のために、転校生の書類にあったテレフオンナンバーにかけてみることにする。これまでも数回かけて、一度も繋がらなかった。

今度も同じだろうと諦^{あきら}めながら、シャツブラウスの胸ポケットに手を延ばす。胸騒ぎがしてひよいと横目を使うと、エレベーターの停まる音が通路の彼方から響いてきた。慌てて物事にあたるとうるくなことはない、と百も承知なのに、やつと胸ポケットから引っぱりだしたカードが、つるつと指先を滑って逃げた。

ひらつと宙に舞う感じで、うすべったいカードは床に落ちて行つた。いやな予感、まるで鉛でも呑み込むような不快さに強まった。

こんな時には、えてしてやることなすこと、裏目に出る。カードの行方を両手で追おうとしたとたん、バッグを取り落とした。

まるでドタバタ劇を演じているように、るみなはうろたえ、さらに傷を深くした。床に落ちたバッグを踏んづけまいとして体のバランスを崩し、あろうことか大事なカードを靴のヒールでしたたか踏みつけてしまったのだ！

名状しがたい不気味な感触が足元から伝わってきた。カードが割れたらしい。カードタイプの携帯電話を、るみな

は自分自身で踏み碎いてしまったのである。

＊

床のバッグに手を延ばしたまま、るみなは上目遣い通路の向こうを見、フリーズしてしまった。

二人連れの男がやってくる。若い男で、るみなは奉職する博徳高校の生徒たちと年齢的には変わりはないようだ。

ひとりはごつい黒い革ジャン、ひとりはタンクトップのシャツというコンビネーションが、調子っぱずれで、気持ちが悪かった。ジーンズは更に気持ち悪く、最近流行している袴はかまみたい裾広がりの不格好なベルボトムだ。

黒の革ジャンは貧相な痩せた顔に品がなく、タンクトッ



プは蛙のように盤広の肉厚な顔がやっぱり下品だ。

顔に浮かんでいる表情で、若者たちの目的は明らかだった。エレベーター・ケージの壁に落書きされたレイピスト宣言が甦った。

ああ……大変だ。

るみなな思考は突如、遅延現象を起こしたように、おそろしくまどろこしくなった。

緊急時のセキュリティ訓練は受けているのだが、いざとなると体がろくに動いてくれない。しかもカードフォンを踏み碎いてしまったパニックが手伝って、るみなは頭がホワイトアウトした。

携帯非常ベルと痴漢スプレーのどちらを選んでよいか、そんな簡単なことが咄嗟に決められなくなる。

るみなはべったりととんびあしで床にすわり込み、狂ったようにバッグの中身を掻き探った。

うろたえきった手が掴んだのは、痴漢スプレーのほうで、それを手にしたのを見定めてから、若い男たちはすかさず対応した。警察にワンタッチで緊急コールされることだけを恐れていたらしい。

男たちの表情が気味悪い笑いに歪んだと思うと、彼らはいっせいにガスマスクで顔を覆った。痴漢スプレーは奇襲用の護身具で、ガスマスクを用意されては威力ゼロだ。

残るはただひとつ、携帯非常ベルだが、ひらけた戸外ならともかく、密閉された建物内部ではどれほどの効果があ

るのか。

慌ただしくバッグの中に携帯非常ベルを探そうとするるみな、瞳は、間近に迫った男たちの手に、凶悪な形状の大型スタンガン^{ミハ}を認めて、まるく瞠^{みは}られた。

常習レイピスト！ 女の側の反撃に、あらゆる対応を用意している！

時間の遅延現象は、いつまでたっても解除されなかった。携帯非常ベルのリングを引っ張って抜けば、二百デシベルの大音量の非常警報が鳴り出すことはわかっている。

男たちの行動速度は上がっていた。走り出している。それなのに、るみなはまだ非常ベルをバッグの中に捜し当てられずにいる。

慌てるな、と自分に言い聞かせることも忘れていた。パニックとはそうしたものだ。日常的に訓練を重ねていなければ、非常事態に接した時、冷静に行動するなど無理だ。るみながバッグを引っ繰り返すことを思いつき、例によって勢いよくばらまきすぎて、肝心の携帯非常ベルが手の届かない距離に転がってしまうのを、呆然と見送った時、男たちの凶暴な青い閃光を吐き散らす大型スタンガンが、電撃ショックでるみなを肉体を麻痺させていた。

筋力が完全に消滅して、るみなは後ろ向きに引っ繰り返った。通路の床にとんびあしでうずくまっていたため、頭部と床の距離は近く、床にぶつかるごつんという音は大きかったが、さほどの被害は受けなかったはずだ。

体が不気味に麻痺し、冷たく力がなかった。このまま死んでしまうのかと思うほど気分が悪かった。生きたまま死体と化したような気分だった。

男たちがガスマスクをつけたまま、るみなの下半身に手を延ばしてきた。爪がウエストの肉に食い入り、いきなりストッキングごとパンティを引きむしられた。

黒い革ジャンのほうは、もうジーンズを足首まで引き下ろしていた。その驚くべき手際のよさは、さすがに常習レイピストのものだった。

感覚が麻痺しているが、それでも粗暴な手が股間を襲い、いきなり指が膣に侵入したことだけはわかった。

指を抜き差しするたびに、粘液質の音がたち、るみなはぼんやりと自分が生理的に男たちの性器を受容する準備ができていたということに驚きの念を抱いた。

こんな時に、たっぷりした量の愛液の音をたてるなんてどうかしている。まるで自分はポルノチックな状況下にあつて十二分に性的に興奮していたみたいだ。

「ばかやろ、いきなりスタンガンつかいやがつて」
がっちりした体格のタンクトップが腹をたてていた。

「見ろ、首をひねった猫みたくなっちまいやがつて。どうやってフェラさせるんだよ、このばかやろ」

「うるせえな、フェラはだめでもアナルがあるだろ」

貧相な体格を黒の革ジャンで隠した男は、るみなの下半身にのしかかり、露出させた女性器に夢中で舌を使いなが

ら、はつきりしない声音をだした。

「みやがれ、何もかも締まりがなくなってブカブカじゃねえか。マンコにらくらく指が五本も入るようじゃ、どうしようもねえぞ、このばかやろう」

そのタンクトップの言いぐさは、るみな自尊心をいたく傷つけた。ブカブカだなんてひどい……ひどすぎる……「うるせえなあ。こいつもうちつとで非常ベル鳴らすところだったんだよ」

「だれが先に入れていいつつた。そこどけ、タコ」

「もう入れちまったよ。もうちよつと待ってればいいだろ」

「てめえ、オレのいうことがきけねえのか。そこ、とつとどきやがれ」

「もうじきいくんだよ。ちよつと待って……」

黒の革ジャンは忙しく腰を振って抽送しながら、切迫した声を出した。

「てめえのこぎたねえチンポ抜きやがれ！」

「あつ、いく！ もういく！」

「この豚やろー！」

無理やり革ジャンの襟首をとって引き離され、悲鳴のよな叫び声をあげて、そいつは白濁した精液を空中に勢よく撒き散らした。

「なんすんだよう……」

「このタコ！」

背中を蹴られて、だらしなく革ジャンが悲鳴を迸^{ほとばし}らせた。

「なにすんだよ、やめろよ」

「うるせえっ」

みっともない蹴りあいになった。攻勢をかけるのは、もっぱら馬力に勝るタンクトップで、革ジャンは床に転がったまま、最初は弱々しく蹴り返し、次第に本気になった。

「殺すぞ、このやろ！」

「このキ○○イ、糞野郎！ てめえなんぞにやられてたまるか！」

るみなはただひたすら、体が濡れた灰のようになる気持ち悪さに耐えていた。もう自分が受けた辱めも、男たちの闘争も彼女の関心から遠ざかった。

このどうしようもない無力な不快感をだれかなんとかしてくれないものか……何か灰色の大きなものが出現して、るみなは男たちの口からあがった悲鳴をぼんやりと遠く意識した。

はっはっとう荒々しい蒸気が噴出^{あえ}するような喘ぎと底深い喉の深奥から漏れる獣



的な猛々しい唸り声^{うな}を聴いたような気がした。

それは人間のものとは到底思えなかった。もし、無関心な遠い気分^{とりのこ}に沈み込んでいなければ、恐怖心の虜^{とりこ}になっただかもしれないかった。

何かしらとんでもないことが起こっていた。それは想像もつかない非日常的なことで、今のるみなには推測の及ばない奇矯^{きぎょう}なできごとだった。

男たちが壊れた人形のように床に転げ落ち、るみな同然無力になり、立ち上がれないままに恐ろしい絶叫を上げつづけていた。それは、それまでの加害者が自分と同じ被害者の立場に貶^{おとし}められることであり、漠然とながら、るみなを自足させるものがあつた。

灰色の大きなものは、どうやら巨大な熊のような、途轍^{とてつ}もなく危険極まりない生き物らしかった……

＊

気を失うということがこんなに気楽なことだと、るみなは一度も想像したことがなかった。

一切の責任を免除^{ましま}されて、雲のなかに浮遊^{きよう}するような気儘^{まま}な自由を享受^{きやうじゆ}することであつた。

だから、るみなは無意識のうちに、蘇生^{そせい}することに強く抵抗したらしい。その自由気儘な浮遊感溢れる境地に安住しようとしがみつく、るみな^{るみな}の意欲にはことのほか強烈な

執着が存在した。

しかし、顔を執拗に叩かれ、体を揺すられ続けることに、るみなはいつまでも耐えられなかった。

なんとしてでも、彼女を失神の穴の底から引きずり出そうとする、強固な意志が、るみなを容赦なく覚醒に向かわせた。

意識が舞い戻った瞬間は、恐ろしく気分が悪かった。ショック症状までが、覚醒と同時に目覚めてしまったからだ。まだレイプが持続しているのか、と勘違いして、るみなは体を硬直させた。粗暴に膣の内部を抽送している男性器の膨れ上がる感触がおぞましく甦った。

剥き出しの男性器が、精液を自分の膣の中にどっぷりと注入するイメージは、堪らない恐怖感をもたらしたからだ。中に出さないで！ と哀願の悲鳴を上げたくなった。お願い、膣の外で出して！

相手がAIDSのキャリアなら、すでに手遅れかもしれないが、それでも相手に哀願してでも、膣内射精を思い止まらせるべきで、るみなが強姦者に遭遇した時、必ず試みなければならぬイメージトレーニングの一環だったのだ。

膣を押し広げながら勢いよく出入りしている男性器は存在しなかった。絶望的な恐怖心のあまり、膣がぎゅっと狭まって、るみなは疼痛を覚えた。

「こら、起きろ。起きるか」

それは甲高く変調された音声のように聞こえた。だれかが変調音声を使って、意地悪いいたずらをしている、とるみなは思った。

なぜそんな感じ方をしたのかわからない。意地でも、その甲高い声に逆らい、そのまま半覚醒状態にしがみついているようにした。

目を覚ますのは気が進まなかった。自分を待ち構えている過酷な人生に気づき、それを少しでも遠ざけていたかったのかもしれない。

しかし、からだを揺するやり方は断乎とした調子になり、甲高い声は間断なく覚醒を促し続け、るみなはその執拗さに耐えきれなくなった。

「こいつ、目を覚ますんだよ。起きろったら！ ほらっ、目を覚ませ！」

甲高い声音に叱咤しったされるほど、酸欠の苦しみが増大した。太い鋼鉄のドリルによって脳内を攪拌かくはんされているようだ。

突然、自分を閉じ込めている大きな水泡が弾けたようだった。るみなは、がはつと激しい音を発して空気を貪りむさぼ、爆発的な勢いで上体を起こした。

るみなは無我夢中で暴れ、自分を拘束するものと闘った。意識が舞い戻ったのは、いやというほど頬をひっぱたかれたからだ。

ショックで一気に半覚醒状態から脱出した。

眼前に、驚かされた猫のようなつぶらな瞳があった。尋

常でない光で満たされた瞳が、錐きりのようにるみな目の深奥に食い込んできた。

「あつ。なに？ なにがあつたの?！」

相手が若い娘だと知覚したが、まだ意識は錯乱していた。自分がどこで、何をしているのか、まったく認識できず、ひどい混乱と困惑の中にあるみなのは落ち込んだ。

「あ、あたしをどうする気なの?！」

猫の瞳をした女の子の手を逃れようとしたが、相手はるみなよりはるかに力が強く、まるで鉄輪が嵌まったように、がっちりと彼女の体を拘束し続けた。

「放して！ いったいどういうつもりなの?！」

腹立ちがるみなに力を与えた。こんないわれのない迫害を受ける覚えはないと思った。自分が何をしたというのだ？

「それを聞きたいのは、こっちのほうだよ」
相手が怒ったようにいった。

「え？」

るみなは度肝をぬかれて、あらためて相手をじっくりと見返した。

「あなた、だれ？」

お洒落なセーラー服を着ている、とるみなは思った。濃紺の地に臙脂えんじのスカーフが粹いきだと感じる。

「ここで何をしているの？」

「だから、それを知りたいのは、こっちだったら！」

「え？」

「もう一度、ショック療法して欲しい？」

やにわにビンタを張られた。鮮烈な痛みとショックで、るみなは脳にかかっていた灰色の靄もやがどこかに消え失せた。

「なにすんのよ！ 痛いじゃないかつ」

「これ以上痛い目にあいたくなかったら、正氣に戻れよ」
「ああつ」

どっと一気に記憶が溢れた。身体中に緊張が漲みなぎり、るみなはパニック寸前で相手の腕を力いっぱい掴み、恐れ戦きながら周囲を見回した。大きな部屋の大きな長椅子に自分が寝かされていることだけわかった。

「助けて！ あいつらは?! あいつら、どうしたの?!」

「あいつらって？」

わずかにつぶらな猫の瞳をほそめるようにして、女の子はるみなを凝視した。

「あなたは、何も知らないの……？」

「だいたいのは、想像つくけど。とにかく大迷惑だよ。ひとの家の前でぶったおれてるんだから」

「あの……あなたがあたしを？」

るみなは突然女の子の下風に立たされた。自分はこの子に助けられたらしい。

「ほかにだれがいるの？ もう目茶滅茶だよ！ ドアの前であんたは下半身まる裸かで倒れてるしさ。よっぽどあんたをどこかに捨てにいかうかと思った」

「すみません、お世話になって……」

あらためて周囲の状況が頭に入ってきた。

「あいつらは……どうしたのかしら？」

「あたしは見えてない。帰宅したら、あんたがドアの前で下半身まるはだかで倒れてるし、泡食った」

「すみません……」

頭があがらなかった。

「で、そのあいつらってレイピストってわけ？ やられちゃったの？」

「やられたみたい」

ますますみな頭の頭は低く垂れてしまった。

「やられたのにわかんないの？」

「スタンガンで、朦朧もうちろうとなって……」

「無防備だな。何やってたの？」

自分よりずっと年下の女の子に、てきびしい叱責を受けて、るみなはますます落ち込んだ。

「いきなり襲われたってわけじゃないでしょ」

「カードフォンを踏んだら割れてしまつて……もうパニックで」

「そんなことだろうと思った。で、相手の男に中だしされたの？」

中だし……これほど露骨で情けない表現はなかった。

「それがわからなくて……」

「だったら、すぐ洗浄しなくちゃだめじゃない！」

「もう間に合わないかも……」

るみなは、とうとう自分の膝にくっついてしまった。気が滅入った脱力感で、全身から力が失せてしまう。

「ま、男のザーメンが大量に床に飛び散ってたから、中だしじゃなかったかな。でも、まあ、ちよつとは中に精子が入ったかもしれないけど。あんたのスーツ、ザーメンで台無しだよ」

「ああ……」

「バスタブにお湯張ったいたから、とにかく体洗ってきなよ。下半身、ザーメンでベタベタ、糊付けされたみたい」

「申し訳ありません……」

「べつにあやまらなくてもいいけど。なんで、あたしの部屋の前でレイプされなきゃならないのかって、頭にきた。その連中、捕まえたらただじゃ置かない……どうしたの？」

「あの。腰が痛くて」

「腰が抜けるほどやりまくられたのか」

「気が遠くなってる……」

情けなさのあまり、るみなは深いため息が漏れた。教師のわが身が、こともあろうに女子高校生に、レイプの事実を知られるとは。

ふた言目には、下半身まるはだか、といわれたが、よっぽどみっともない恰好だったに違いない。

「ほら、手に掴まって。あそこ、痛む？」

「ちよつと……」

「やっぱり婦人科の医者に診て貰ったら？」

「ええ……後で」

「濡れてないところへ無理やり挿入されるんだから、堪らないよね。最近のレイピストってアナルまでフィストファックするっていうけど、されなかった？」

「さ、されなかったと思うけど」

全身、力の抜けた状態で、初対面の女子高校生の手に縋り、ようやく浴室まで歩いた。もう何もかも見られてしまったと思えば、やけくそになって、羞恥心も薄らいだ。年齢差はあるが、やはり女同士だ。

「拳骨げんこつなんか突っ込まれたら、ぱっくりと肛門裂けちゃう」

そんな変質的な目に遭わされたら堪らない。

「でも、あなただって同じレイピストに狙われるかもしれないんですよ」

「あたし？ 心配ないわよ」

何が心配ないのか。集団で襲われたら、護身具セキユリタイー・グッズな

ど何の役に立たないのに。

女子高校生はまるで母親のようにるみなをあしらひ、脱衣させ、シャワーで汚れた下半身を洗浄してくれた。

よほど力が強いのだろう。さもなければ、独力でるみなを部屋へ運び込むことなどできなかったはずだ。

下半身は真っ赤な蚯蚓腫れみみずばに彩られていた。レイピスト

がるみなの下着やストッキングをむしり取った時、爪で掻きむしったのだろう。

女性器自体は損傷を被っていなかった。普段より赤く充血している程度だ。

「医者に検査して貰わないとわからないけど、男が中だししてなければ幸運だったと思わないと」

女子高校生が、まるで日常茶飯事のように平然とレイプの現場に立ち会っていることに気づいたのは、その時だ。

この子はよっぽど肝がふといのか、それとも情緒麻痺のタイプなのか。普通の女の子であれば、レイプの被害者を目の当たりにしただけで気が動転してしまうだろう。

「体に力がないから、お風呂には入らないで、シャワーだけにしといたほうがいいね」

下着だけになった女子高校生は、軟体動物みたいにぐにやぐにやのるみなを腰掛けに座らせておき、片手でしっかりと体を支え、残る片手でシャワーのお湯を浴びせて、洗い流してくれた。

そのやり方は親切心溢れるというものではなかったが、ひどく的確なものがあった。まるでるみなを赤ん坊のようにあしらうのだ。

身長はほとんど変わらないのに、なんて力が強いんだろう……るみなは自分が赤ん坊のように扱われるのが、妙なもの珍しかった。

後頭部を片手で支えておいて、ボディソープを含ませた

スポンジで胸や脇の下を巧みに洗ってくれる少女はベテランのナースのような頼もしさがあった。

温かいお湯が皮膚を流れる感覚を味わっているうちに、いつしか意識が拡散し、寝入ってしまったようだ。

バスタオルでくるまれて体を拭かれたことも、ほとんど覚えていない。

どれだけ眠ったのか、目を覚ますとベッドに寝かされていた。口がひどく渴き、体が重く、寝返りを打つのも容易ではなかった。

熱が出ていたらしい。体が自分のものようではなかった。



＊

「ねえ……すみません。だれかいませんか……」
かすれた声で助けを呼ぶほかなかった。二重カーテンの閉まった部屋は暗く、真夜中のようにでひたすら心細かった。

「だれか……お願い」

「目が覚めた？」

音もなく、あの少女がベッドサイドに立ち、るみなを見下ろした。まだ制服の女子高校生姿だった。それがなんともなく、安心感をもたらしした。

「今、何時ですか？」

声が自分のもののようにではなかった。恐ろしいほどしゃが暖れていた。

「十一時を過ぎたところ」

「いけない、あたし帰らないと……」

少女の乾いた掌が、るみな額の額に触れた。

「やっぱり熱が出たわね。調子悪そう」

「すみません。喉が乾いて……お水を戴いただけます？」

「わかった」

影のように少女が消え、戻ってくると、るみなは上体をベッドから起こされ、喘ぎながら冷たい水を飲んだ。喉を通る冷水の感触が発熱した体の細胞に心地よかった。

「ありがとうございます……あたしずいぶん眠ってたんですね。ご迷

惑おかけしてしまつて」

「帰るつていうけど、あんた歩けるの？」

「たぶん……」

「またレイピストが待つてるかも。あんたいいカモだよ」とたんに悪寒^{おかん}が体を走つた。

「それは困ります」

「困るだろうね。同じ日にレイプのダブルヘッダーだ……」

少女はジョークをいつているのかまじめなのか、よくわからなかった。

「あたし、どうしたらいいでしょうか？」

「あんた、ショックで発熱したみたい。救急車呼ぶ？」

「あの、それも困ります」

「レイプされたことが明らかになるから？」

「そ、そうです。警察沙汰になったら、困ります」

「ことなかれ主義なんだ。学校の教師なんて、そんなもんかもね」

「どうして、それを知ってるんですか？」

愕然として、るみなは少女の顔をベッドから見上げた。やっぱり体に力が入らない。自力で起き上がろうとしたのに、わずか一センチも体が持ち上がらなかった。

「悪いけど、あんたのカード手帳見ちゃった。身元を調べようと思って」

「手帳……？」

「うん。具合悪かったかな？」

「ええ。しょうがないですけど……」

「あんたってもてるんだね、るみな先生」

「手帳に書いてあるのはみんなボーイフレンドですよ」

「そんなのどうだっていいけど。あんたにはさんざん迷惑かけられたから、手帳ぐらい見たって悪く思わないでね」

「構いませんよ。悪いことしてるわけじゃないし」

「でも、あまり細かいことを具体的に書かないほうがいいと思うよ。手帳って落としやすいし」

「でも、ちゃんとシークレットがかかってるのに……」

「悪いね。場合が場合だし、ハッキングさせて貰ったわ」

「ハッキング……」

この少女はコンピューターのハッカーだというのか。漠然とした驚きを覚えたが、その程度のものでしかなかった。発熱のため気分は悪く、いつまでも関心を持ちつづけていられなかった。

「だれか引き取り手がいれば、連絡してあげるけど」

「そんなの、いませんよ」

「身内とか、恋人とかいないの？」

「迷惑かけることになるから……」

「あたしなら、何もかも知られているしって」

「そうです。すみません」

「あんたって正直だね、るみな先生」

「正直だけど、ひどい馬鹿です」

「あんまり自虐的じぎやくにならないほうが……ま、好きならいいけど」

「そんなの、好きな人間がどこにいますか！」

思わずかつとなったが、線香花火みたいに長続きはしなかった。

「あたしはどうせ昔から男運が悪いんです！ いいんです！ 諦めてますから！」

「結構な美人なのに、もったいないな」

慰めている気かどうか、本気でいっているような言い方だった。

「レイプされたぐらいで、自殺なんかしませんから、平気ですよ」

「それはそうだけど。あんたってかっとなると馬鹿なことをしそうなタイプ？」

「せいぜいやケ食いして、ボーナス払いで買物するくらいです」

「そうだと思った……ま、今夜のところは安心して眠って。あたしは一晩中、起きてるから」

「ありがとう……まだお名前も伺ってなかったのに」

「あんた、ここへなにしにきたわけ？」

少女は呆然とるみなを見つめた。

「え？」

「え、じゃなくて……あたしが何者か知らなかった？」

「それは初対面ですから」

「とっくの昔に知ってるそばかり思った」

「あの、あなたのお名前は？」

「だから、犬神……」

少女は苛立たしげにいった。

「あんたは、博徳高校の先生で、ここへあたしを訪ねてやってきたんでしょ」

「え？ え？ 犬神って？」

「あたしが犬神。犬神メイなの」

「だ、だって犬神って、犬神明……男生徒じゃなかったんですか？」

「明と漢字で書いて、メイと読むの」

「あ、あなたが、転校生の犬神さん?！」

げえっとるみなはいいそうになった。

「だ、だって、そんなの困る！ あたし困るわ！」

「あんたがどんなに困ろうと、あたしは転校生の犬神メイなの！」

断乎として、少女は言い放った。

(続きは正式版でお楽しみください)

<http://www.ebunko.ne.jp/>

あとがき

さらば、野獣の刻

作家大藪春彦が急逝きゅうせいしたのは、今年の二月のことで、わたしの記憶では、ひどく寒い日だった。人の魂が肉体を捨てるのは、いつも寒い冬の一日のような気がする。

わたしの作家生活を決定づけたのは、何人かの優れた作家たちなのだが、大藪春彦は間違いなくその決定的な作家のひとりだった。大藪春彦の訃報ふほうに前後して、数人の作家たちの訃報を次々に聞いた。

国民的作家とまで呼ばれる某大作家の死にもまさって、大藪春彦の死はわたしにとって大きかった。

大藪春彦は、生前、決してその作品に見合う評価を受けた作家ではなかった。日本の権威主義的大衆社会においては、大藪春彦が正当な評価を受けるはずもないのだが、別にそのことで抗議するつもりはない（某国民的大作家ですらも日本の文壇においては、疎外をうけていたという）。

豚社会には豚文化の伝統というものがある。豚の伝統的社会が狼を正当に評価するはずはないではないか。大藪春彦への弔辞ちようじは、わたしに関する限り、その一語に尽きる。

大藪春彦はおよそ並外れた作家で、まったくもって規格はずれで、それゆえにわたしの愛する作家であった。わたしはことさらに動物学上の豚に対する偏見の持ち主ではな

いが（豚も猪も食べてしまいたいほどかわいい）、比喩的な意味合いでの豚は昔から嫌ってきた。

大藪さんは、周知のことだが生前、ハンティングを趣味としておられ、その一点で相容れないわたしは、生前二回しかお目にかかっていない。

銃を持たない野生動物を遠距離から殺すのは、いかにも卑怯ひきょうなことであり、それより銃で射ち返せる人間を射つてください、などと途方もないことを口走るわたしに、さぞかし大藪さんは当惑されたであろう。

まあよい、人は人、作品は作品である。大藪さんに深い敬愛の情を抱いていたわたしも、銃によって世界と関わりあう大藪さんは、はつきりと苦手だった。

もしかしたら、アフリカ水牛の恐ろしい突撃と脂汗あぶらあせを滲にじませつつ命を懸けて対峙たいじするライフルマンを描いた大藪さんの凄絶な描写は、わたしのイチヤモンへの遠回しの回答だったのかもしれない（その描写は何度繰り返されたかわからない）。

ずっと昔のことだが、大藪ノベルへのあまりに偏見に満ちた冷遇と無視に我慢ならず、わたしは自作小説のあとがきを借りて、野放図な大藪讃歌をやったのけたことがある。どれだけ大藪春彦がすごい作家か、どんなにその小説が物凄いか、わたしは思いのたけを存分に語り、読者たちの大反響を得た。

もちろん、自作小説の著書のあとがきに他の作家の大賞

賛をやったのけるなどというのは、たいへん非常識なことであって、空前絶後のことだろうと確信していた。作家という人種はひどく世間体を気にするものなのである。

別に奇をてらい突飛なことをやってのける奇行趣味はささららないのだが、結果的にそうなるってしまうことはままある。

このほど、自作小説のあとがきに他の作家を賞賛しまくる作家が存在することを、この作品「月光魔術團」の担当編集者本城剛史に教えられた。

その作家とは、酒見賢一さんである。この四月に新潮文庫から刊行された酒見さんの「陋巷ろうこうに在り」一巻のあとがきを興味のある読者はご一読あれ。空前絶後のはずの快挙が破れてしまった。

わたしは昔からおおっぱらに他人に賞賛を受けたことがない作家だから、すぐく変な気持ちなのだ。本当はうれしいのだが、うれしさの表出の仕方というものを知らない。大藪さんもこんな気持ちだったのかなあ、と思う。

大藪さんは、最初にお目にかかった時、当時のわたしがはまり込んでいた最初の大改竄かいざん事件のことを知ると血相変え、がばと膝を立てられ、そのけしからぬ出版社にこれから殴り込みに行く、とおっしゃったのである。

ああ、これが親分気質というものか、とわたしは感嘆した。だが、わたしは生来、親分子分の伝統とは程遠い一匹狼なので、大藪さんの強烈なご厚意はありがたく辞退させ

て頂いた。

それでは、今度狛に連れて行ってあげよう、と大藪さんは言ってくださった。

狛に行った人間は、その目方をいかななく披露するものだ、と大藪さんは信念を語られた。根性なしのわたしは、大藪さんの鑑定を受ける気など毛頭なかった。

わたしは戦争時の白兵戦において敵兵を射殺することは出来ても、素手の野生動物を遠方から射撃するのは、どうもしくくて。その時、前記した発言をなしたのである。

その後、いま一度お目にかかった時は、大藪さん以外に当時の角川書店社長、角川春樹氏、大藪春彦評論家鏡明が同席しており、これといった記憶は残っていない。

もう大藪さんは社会的に是認された流行作家になっていたのである。

言霊は、不意をついて訪れる。「月光魔術團」の言霊もそうである。

実を言うと「月光魔術團」の言霊を招いたのは、イラストレーター泉谷あゆみさんなのだ。

「一生かけても、狼の紋章をどうしても漫画化したいんです」

と、泉谷あゆみさんに懇願こんがんされた。

「力不足かと思いますが、ぜひともやらせてください」

「クリスタル・チャイルド」を熊野に二年間こもって描き

あげた直後だった。

「クリスタル・チャイルド」に続いて、「狼の紋章」のシナリオを書くことになった。

時代背景を近未来ないし現代に移す、その作業の段階で驚くような変化が生じた。

少年犬神明が訪れないのだ。「女神變生」を書いたときと同じである。独り生徒会、歩く生徒会の異名を持つ生徒会長鷹垣人美が出会った転校生が少年ではなく、女の子だとわかった瞬間、「狼の紋章」のシナリオは急転直下「月光魔術團」として生まれ変わってしまった。

なによりもきっぱりと言霊が違う。舞台は、二十一世紀初頭、しばらく後に月齢を調べると、2001年であることがわかった。

わたしに関する限り、言霊は常に意表をつく。作家本人に先の展開が読めないのはそのためだ。

「二人のまどか」とタイトルまで決まっているのは、まともと泉さんの「きまぐれオレンジ・ロード」のノベライゼーションだ。わたしがみずから申し出て、まともと泉さんのオーケーを頂戴ちようだいした小説版「きまオレ」のタイトルである。

絶対におもしろそうだ、と読者の皆さんが思ってくれば、実現するかもしれない。

著作権問題が入り組しょうかんんでいて、すんなりと実現するとは思えないが、言霊が召喚しょうかんされてさえいれば、魔法が使え

る。まつもと泉さんの「8マン」同様に実現したら愉快だなあ、というお話である。

まつもとさんのCD-ROM「COMICON」volume1だが、二月のCD-ROM売り上げの二位に食い込んだ。一位はあの「エヴァンゲリオン」だから、大健闘といえる。などといっているが、わたしは今のところ、「エヴァンゲリオン」という作品は知らない。評判なのだそうだが、かの富野さんの「ガンダム」だって、知ったのは二、三年後なのだから、ましなほうだ。

そういえば、昔はガンダムだのイデオン、ダイターンだの、白熱させるアニメが沢山ありました。

「COMICON」volume2、今秋発売予定なのだが、本当に年内に出してくださるんでしょうね、まつもとさん。

それまでに、「二人のまどか」の著作権問題がスツキリしているといいのだが。

さて、「月光魔術團」第一巻のイラストは、全ページカラーで描きおろされたものである。泉谷あゆみさんに無理難題の限りを尽くして、描いて貰った。

まつもと泉さんの評では、泉谷さんの描く男性は、ごく男の色気がある（！）とのことだが、今回の「月光魔術團」では、わたしの注文で「女の子の色気」に徹底して貰った。

平井先生に無理矢理描かされているのです、と泉谷あゆ

みさんはいつているようだが、それは本当のことなのである。

しかし、泣きの涙で描いているわりには、ヒロインの犬神メイを初め、登場する女の子たちは絶品揃いであり、担当の本城も大変悦よろこんでいる（男の子はみんなエッチなのだ）。

当然のことだが、「ボヘミアンガラス・ストリート」に続き、「月光魔術團」もオンライン出版を志している。しかも、こんどはインターネット版だ。泉谷あゆみさんの全イラストがカラー化されたのも、そのためなのである。

インターネットといえば、昨年十月、パソコンを3台もハンドメイドして以来、ついにパソコンと深間に嵌はまってしまったようである。

DOS/V機のハンドメイド、小学生のラジオ作り以来の嵌まりかただった。実にスリルがあって、時々悪夢を見たりするが、忘れられない。当時、最高速だったPenium 133、わずか半年後の今は、並みの高速機だ（ぢぐじょう）。

〈1996年6月 アスペクト版あとがき〉

月光魔術團1

春の魔法使い デジタル立ち読み版

発行日 2000年9月20日

著者 平井和正

イラスト 泉谷あゆみ

デザイン 伸童舎

表紙英文 エドワード・リプセツ

発行 有限会社ルナテック

〒125-0041

東京都葛飾区東金町3-13-6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, AYUMI IZUMITANI,
LUNATECH

※本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。